

少女(♂)の過ごす異世 界冒険記

未来琴音

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

現世で何の変哲もなく過ごしていた男性が不慮の事故で亡くなってしまい、その男性の魂が神様と出会い異世界に転生する。

しかし異世界転生したその世界での性別は女性になっていた!?
そんな男性から女性へと変わった少女「ノルン」が過ごす異世界のお話。

目次

一章

きつかけというのは唐突にやってくる

もの | 1

変なことから始まる第二の人生

5

二つ目のお任せ特典 | 12

希少価値とされる魔法 | 21

二章

小さな同居人 | 30

旅の始めは準備から | 41

道中に一難は付きもの | 51

大森林での事情 | 63

湖にいる精霊さん | 74

湖の祀り物 | 87

大都市ラズリー | 99

騎士養成学校の裏前 | 110

騎士養成学校の裏中 | 122

騎士養成学校の裏後 | 134

大魔法使いとしての戦い | 149

三つ目の特典とこれから | 164

一章

きつかけというのは唐突にやってくるもの

現代の人生において、俺は特に何事もなく過ごしていた方だと思う。

普通に仕事をして、普通に趣味をしたり家事をしたり。

家庭でも亀裂が生み出すようなこともなく順風満帆に暮らしていた。

そんな何の変哲もないある日のことだった。

湿気の多い雨の日、傘を差しながら買い物袋持った状態でいつも使っている歩道橋を降りていた時、雨でぬかるんでいた段差に足を滑らせて転んでしまった。

だけど、転んだ後に力が全く入らず、意識が遠のいてしまっていた。

「あれ……なん、で」

雨の音でかき消されていくその言葉が最後となり、俺、「しげのてつや嶋野哲也」25歳としての人生はそこで終わってしまった。

*

「歩道橋で転落して打ちどころが悪く、くも膜下出血による失血死。だそうですよ」
走馬灯のような思いでに浸りつつも、向かい合わせで座っているロングヘアの女性は
残念そうに告げる。

そんな理由で死んじやったんだ。思いのほかあっけなかつたなあ。

「そしてここで貴女と話している、と」

「はい。死んだ後にすぐ魂をこっちに呼び寄せました」

にこやかに言いのける向かいの女性。これでも神様だというらしい。

そして、魂だけとなっている俺は白くどこまでも広い空間で神様と死ぬ前の記録を見ながら、対談している。

「だけど、貴方が死んだのはちよつと予想外と言いますか。時期がまだではなかつた
ような気がします」

貴方のような人は長生きする予定のはず……と、小さく呟いて焦っているようだ。

「じゃあ、生き返れるのか？」

「それは出来ません。あの世界と魂が分離してしまった為、元の世界で蘇生すること

は不可能です」

そんな都合よく戻ることはないんだ。

せつかく前に買ったゲームや本を消化するという密かな思いはその言葉で潰えた。

「とはいえ、急に起きてしまった事で私達も想定外なものでしたので。お詫びに他の世界で生きることが出来ますよ」

「それは、漫画とかで見た異世界とか？」

その問いかけに神様は頷いた。

漫画の世界とかでしか見れなかった物が実際にあるということ少し驚きはあった。

そして、俺にもその出来事やきっかけが舞い降りてくるとは思わなかった。

だけどその世界で生きられるなら。

第二の人生を歩めるのなら。

「じゃあ、それで」

「わかりました。貴方を異世界へとご招待します……その前に、何か転生ついでに欲しい物とかありますか？」

これも転生する特典で、よくチートとか持つてる状態で過ごしたり出来る前の選択肢があるというのを展開だ。俺にもこういうのがあるんだなと思い、どんなものかいいかと考える。

考えて、考えて、考え抜いて数十秒。

「神様のお任せで。だけど、生まれ変わるならちゃんとした人間でありたいのは条件で」

「お任せでいいんですか？もつとこう、巨万の富で永遠にくらすとか。圧倒的な力で世界を救うとか」

魅力的な提案や合いそうな意見を沢山言い続けるのだが、俺はどれもしつくりこなく黙ってるままだった。

心が折れたのか、ため息をつきながらさつき言った俺の言葉を受け入れた。

「わかりました。私の気ままなお任せでいくつか付けます。ではそのまま力を抜いて意識を集中してください」

そう神様が言うのと、俺の視界の回りで光が強み始める。これから転生先へ向かうための儀式らしい。

俺は目を閉じて静かにその時を待った。

そして、その魂は神様の前でいなくなり次への人生へと向かっていったのだった。

「次の世界で、健やかに歩むことを私達は祈っています」

変なことから始まる第二の人生

意識が戻ってくると、朝日が直接顔を照らしていた。

眠かった眼を擦り、ベッドから降りて照らしている窓を開き、朝の風と外の空気を体全体に染み込ませる。

あの後、普通の家庭に産まれて育ち、16歳になったある日に両親から独立してそれほど大きくない街の平家で暮らしている。

ノルン・アーネスト、16歳。それが今の俺である。

俺といつても、それは意識だけの呼び方になっている。何故かといえば、身だしなみを整えるために買った全身の見える鏡の前で立ち自分を見る少女を見てため息ついた。

「今のお……私、女の子なんだよなあ」

そう、女の子なのだ。

元の性別ではなく、胸もそこそこあって母から譲りうけた遺伝子の、茶色のロングヘアで体つきがごつごつしてない一般の女性なのだ。

生まれてから数年後の7歳の時に、自分の姿を今の実家の鏡で見た時には現実を突きつけられた感覚で呆然としていた記憶がある。

これが神様の気ままなお任せの一つなのだろうか。

鏡の前でまた一つため息をついた。

「なっっちゃったもんは仕方ないしな」

そう自分に言い聞かせながら朝を過ごすのが日課になっている。

ちなみに、口調についても母親に女の子がそんな乱暴は口調はだめですよと怒られてしまい、呼び方も私に定着しつつある。

「やっっ」

着替えを一通り済まして、スカートの乱れや上着のチエックを確認して玄関から外へ出る。

私の住むここ中小都市のような街「ペリト」は出店とか喫茶店などといった店がちらほら存在しているところもあれば、少し進んだ先が畑とかになっているのどかな街。

そして、異世界ならではの店も見れたりする。

武器や防具が売っている冒険者向けへの装備屋や、ポーションや回復薬を専門とする魔法店とかも街中で見かけている。ここは元とは違うんだなと実感できるところだ。

「今日も平和だな」

などと呟きながら、大通りで売っている店で丸形のパンを買っては頬張り、中央広場

に見える木製のベンチに座つて休息を取る。

ここに来てからまだ数ヶ月、この街でのことを詳しくは知らないがある程度は分かつたような感じ。

美味しいお店とか野菜とか果物が置いてある八百屋のような出店。

毎回外を歩いては、流れゆく人々の顔がいつも新鮮で飽きない。

「お嬢ちゃん。今日もここで休んでるのかい？」

ふと隣で杖をついた老婆が話しかけてきた。

その言葉に頷きながらベンチにもう一人分のスペースが空くように移動する。

「そうですね。ここだと色んな所が見れて飽きませんから。貴女もこちらで？」

「そうだねえ、わしもここで失礼するよ」

よっこいしょ、と隣で腰を下ろす老婆。

そしてその老婆と今日も楽しく話をした。

*

暫くしてその老婆と別れた後、次の目的地へと足を進めて到着する。

それが、この目の前に書かれている扉に明記された冒険者ギルドの隣にある依頼掲示板のリストだ。

一応、この街に冒険者が寄って来た時に依頼を受けるための冒険者専用のギルドがある。

その扉前に置いてある掲示板の依頼を受けにやってきた。

依頼と言っても、運搬や店の手伝いなどと言ったRPGゲームでよく見るおつかいクエのような感じがほとんどで、討伐や護衛任務とかは全てギルド内にある依頼掲示板に記載されている。

その外の依頼掲示板の中から魔法店で必要な薬草を採取という依頼の紙を取って、ギルド内に入って一番右側にいる受付の人に渡す。

「これ、お願いします」

「承りました。手続きしますので少々お待ち下さい」

喧騒な受付所を一通り見渡しながら受付の人から専用の依頼カードというのを渡される。

そこから外に出て、カードに記された場所へと向かっていくのが一連の流れになっている。

ペリトから少し出てからの草原で依頼内容の薬草を採取する。

「エンテリ草……5つ」

主に草原内に小規模で生えている花であり、ぽつぽつと出ている花畑のようなところで採取出来る薬草の類。

ポーション系とかで主に体力回復とかの材料として使われるものらしい。

「でも、これどうみてもパンジーだよね」

元の世界での道端で小さく咲いてたりとか、花屋とかで綺麗に保存されている花でよく見かける。

ちよつとだけ花の形とかが違うので、それによく似た感じなのかな？

「よし、これで全部かな」

決められた数を布製の小袋に入れてペリトに戻り、看板にポーションのマークが入っている魔法店へと向かう。

「こんにちはー、依頼の物を届けに来ましたー」

入店して少し怪しげな雰囲気醸しながらも暗い出口から三角帽子の被った女性が出てくる。

そして小袋に入っているエンテリ草5本と依頼カードを渡して、ギルドからの依頼は完了する。

これは外に出ている依頼掲示板限定の手続きで、受付の人からそのカードを製作して

依頼主にそのカードが終わったと同時に報告されるようになっていく仕組みだとか。

その辺は最初に来た時に説明された気がする。

「ありがとね、可愛い女の子ちゃん。報酬の銅貨15枚よ」

少しばかり妖艶な三角帽子の被った女性から報酬をもらいその店を出る。

ちよつとだけ変な店だったような気がする。

だけど、棚に置かれてる値札のついた物とか見たらちゃんとした店なんだな。

「後は今日の夕飯を買うくらいかな、ぎゃんっ！」

頭の中で晩御飯の候補を挙げていたら、何かに衝突されて尻もちをついてしまった。腹部がすぐく痛い、みぞおちに何か重い一撃をくらった感じで痛かった。

「いったあ……誰だよ、ぶつかってきたの」

「……あ」

馬乗りになっているぶつかってきた敵を睨む。

その目の前で見たのは、ボロボロのワンピースを着ていた銀色の髪で短い私より年下っぽい少女だった。

罰が悪そうにこつちを見て如何にも泣きそうにしている。

「ごめんなさい。ぶつかるつもり無かったです、その逃げるのに夢中で前を見てなくて」

「逃げる？ 一体何にー」

逃げているの、と言いかけたところでその正体は大通りの奥から聞こえてきた。

「どおおここに逃げやがったあああ!!!!」

この街で似つかない大声で、低く野太い男性の声が何かを探し回っている。

その声を聴いた少女は恐怖に満ちて体を震わせていた。

「た、助けて下さい。あの人にまた捕まったら殺されちゃう……」

「……わかった。事情は分からないけど、今はここから離れよう」

震える少女を前にして置いていくわけにもいかず、助けを求められてしまったのでと
りあえずその少女を立たせて手を握り、この場から逃げることにした。

どこに逃げたらいいかわからないけど、大通りの方なら人混みで見えにくいはず。

少女の手を握りながら走りながら逃げるルートを考える。

ああいうタイプは、視野が狭くて細かいところは見えてないような感じだろう。

「私の家で暫く匿ってあげる。過ぎるまで居ていいよ」

「ありがとうございます」

今はやり過ぎることが先決、とりあえず少女を自宅に匿う方針で走りを進めることに
したのだった。

二つ目のお任せ特典

人助けとかは、昔からよくやっていた方だと思う。

テストの勉強を手伝ってあげたり、階段で困っていた老人を助けてあげたり。

一部からは偽善者とか言われたこともあったが、それは学生時代の話。

その人助けが日常と化していた時に母親から

『人助けと自分の身を守ることは一緒よ。それは覚えておいて』

と注意され、自分の事を見るようにもなっていた。

それがよく刺さる言葉になって実感したのは死ぬ数日前の出来事だった

*

少女をリビングの木製の椅子に座らせ、台所に立ってお茶の準備をする。

私の家の景色をちらちらを見ながらおとなしく待っているのを尻目に、隣にある臨時の食糧貯蔵庫から丸型のクッキーを数枚取り出してお皿に盛りつける。

「どうぞ。あまりいいものじゃないけど」

明日のおやつにと、とっておいた物だけどまた買えばいいか。

クッキー入りお皿を少女のテーブルの前に置いた。

少女は、そのクッキーをおっかなびっくりで一枚とりながら少しずつ食べ始めた。

「……おいしいい」

「君、名前は？」

向かい側の椅子にすわって、改めてその女の子の容姿を見る。

ところどころに穴の空いてある布製のワンピースでシヨートヘアの銀髪。顔も少し幼げが残っていることから私よりは年下だと判断できる。

そして、時々見える両腕や鎖骨から首元にかけて打撲痕やミミズ腫れの傷跡も少し残っていた。

「ヴェル。ヴェル・スカリールです」

「私はノルン・アーネスト。この街に逃げた理由って何？」

ヴェルという少女は拙いながらもゆっくり話してくれた。

簡単に言うくと、人身売買で引き渡された先の主が酷く暴力的で、機嫌を損ねると端くれみたいな存在という理由でいつも道具のように強く叩かれたりストレス発散のごとくに使われていたらしい。

DV夫が気に食わない時とか発散の時に妻やその子供に暴力振る時と一緒なのだろうか、それがこの世界でも起こっているという。

「酷い、話だね」

「……はい。でも、私達のような人はそうすることしか生きられなくて、親も親戚失った子達は皆そのように扱われることが多いそうです」

孤児を引き取って後は自分の思うがまま、か。

「私も、その一人です。小さい頃に親を失ってそれから」

「それ以上言わなくていい。今日はもう休んでいって」

私のその言葉でヴェルが一瞬目を見開いた。

だって、話してる途中に泣きそうになってるのを見たら止めたくなくなるじゃん。

「いいんですか……?」

「うん。なんか壮絶だっていうことは分かったし」

「騙しているのかもしれないよ?」

「いいよ。それでも」

ありがとう、ごさいますというお礼の言葉の途中でヴェルが少しずつ泣き出した。

私は、目の前で顔を手で隠しながら泣いてるヴェルの頭を静かに撫で始めた。

あれから数十分ほどで泣き止んだヴェルは安堵を得たのかとても眠そうにしていたので、私の寝室にあるベッドに運んで寝かせた。

そして、この後についての事をリビングで椅子に座りながら考える。

まず、ヴェルの語っていた人身売買についてのこと。

あれは世間一般で言う『奴隷』ということなんだろうか。

漫画やゲームでの話でよく見かける物で、人として扱うのではなく道具として扱われていることがほとんどだ。

そしてこの世界でお決まりのような感覚でいる端くれみたいなもの。

「決まった悪役ってのは、どこでもいるんだな」

空気が抜けたようにため息をつく。

そして次に今後のヴェルについてだ。暫くは匿うということ約束付けてさらにバツクでは物扱いされている。

ただ、俺が平和な日常を歩むのであれば匿う期間を設け、そこからヴェルを安全な場所に連れて何も知らなかった出来事にするのもある。

「魔法も何も持たない私があの子を保護するにしても、相手が押しかけて来て何も出来ずにすぐに終わるな」

だけど、ヴェルと話してる間に見せた沢山の傷跡と必死で縋って助けを求めたあの顔

を見て簡単に切り捨てることは出来なかった。

そう、前のあの時のように。

前の世界で転生する数日前で長年付き添っていた幼馴染の子を助けた後に後ろ指で偽善者と騒がれてもそれでも幼馴染を助けていた、自分がボロボロになっけていても。

目を閉じて少しだけ黙想する。

「私は——」

言いかけたところで扉からノックの音がした。

数時間話したりしていたのか、外は日が傾き落ちている。

玄関に向かい、扉を開ける。

そして、一瞬にしてそのお客から感じたのはとてつもないものだった。

「ここに銀髪の少女がいると聞いて迎えに来たんですが」

声のトーンは違っているが、私の脳内で警鐘を鳴らしていた。

その大男は言葉こそ柔らかく言っているが、手元に持っているそれは言葉とは正反対のものだった。

銀製の長剣が、その右手に握られていたのだ。

「し、知りませんねそんな子。銀色の花束と勘違いしたんじゃないでがっ!!」

白を切る寸前で体が浮かび上がっていた。

長剣の柄で脇腹を殴られてリビング奥の壁に吹き飛ばされて叩きつけられる。

「っは……あぐうう」

「ふん。いることは既にわかってんだよ、勝手に上がらせてもらうぞ」
呼吸が乱れ、息が苦しい。

脇腹からの痛みが尋常じゃなく、骨でも折れてるのではと勘違いするくらいに痛い。
立ち上がることも出来ず、その場で唸る。

大男はそのまま寝室に土足にで上がり込んで何かを見つけたか思うとその正体を左手に抱えながら……正確には引きずりながら出てきた。

「いやあああ!! 離して! 痛い!! 痛い!!」

「黙れ藻屑!! 勝手に抜け出しやがって、帰ったら処分してやる!!」

銀髪を引っ張りながら必死で抵抗するも無駄となっているヴェルを引きずり帰ろうとしていた。

「ま……待って」

「うちの物が世話になったな。後でこいつから出る金で詫びてやるよ」

「待って……」

このままではヴェルは殺されてしまう。

そう思っていたら、いつの間にか悲鳴を上げていた体が急に軽く感じて髪を掴んでい

かく言う俺も驚いていた。

「……なんか出た」

自分の手を見つめる。

そしてまだ心の中で燻っているものがどンドン湧き上がっていた。

これは一体何なのかわからない、だけどこの世界で言う言葉なら代用として使えるかもしれない。

「魔法、なのか？」

「マジックマスター……あの全ての魔法を自由自在に扱う伝説の大魔法使い様ですか
!？」

隣でヴェルが伝説の人を見たような憧れでその正体を言葉にした。

大魔法使いなのはわからないけど、なんか気が抜いたらどつと疲れてしまった。

「きゆう……」

「大魔法使い様?!？」

あー、なんかこう。馴れないものはするもんじやないなあと実感を味わってその場で意識が飛んでしまった。

これも神様の転生の特典の一つなのだろうか。

後、
脇腹超痛い。

希少価値とされる魔法

高校生の頃だ。

自宅に友人を招き入れて遊んだ家庭用ゲーム機のソフトで、RPG系をやりこんでは駄弁りつつも時間を過ごしていた時

『そうだ。お前が魔法を使えるようになったらどんなのがいいんだ?』

RPGの戦闘画面で三角帽子の被った魔法使いが炎の魔法を使ってるアニメーションを見ながら興味津々でその友人は投げかけてきた。

『そうだな。この魔法使いが使ってる魔法とか使いたいな』

『なんだ、普通な回答だな。てつきりお前の幼馴染にいたずらする魔法を作りたいとかじゃねーのかよ』

口を尖らせ、人のベッドの上でポテトチップスを貪りながら残念そうにした。

そんな友人を尻目にして再びゲーム画面に視線を戻すと戦闘勝利という文字が浮かび上がり、気前のいいBGMが流れていた。そして丁度その魔法使いがレベルアップして楽しそうなモーションをしている。

魔法……ねえ。

*

懐かしい前世の記憶を思い出した辺りでゆっくりと目を開ける。

目の前には見知っている木製の天井が見えていた。

「……眠ってたのか、私」

ゆっくりと身体を起こしてさらに意識を覚醒させる。

外は既に暗くなっており、静けさが広がっていた。

そうだ、ヴェルを助けるために、心の奥底から湧き出る何かをぶつける様に大男を飛ばして、その反動で疲れと一緒に気絶したんだっけ。

「そうだ！ヴェルは？」

周りを見ても視界に映らない銀髪の子がいないので、ベットから降りて部屋から出ようとした時に、足先でぶつかった柔らかい感覚があった。

足元を見ると、床でヴェルが丸くなって寝ていた。

気配で起きたのか、重い瞼を開きながら見上げてくる。

「大魔法使い様……？」

「良かった。女の子が床で寝てると、身体が痛くなるよ」

ひよいとヴェルの体をお姫様抱っこして抱え、さつきまで寝ていたベッドへと運ぶ。この少女を持ち上げた時、すごく軽かった。

日本の全国平均年齢基準の体重感覚で言ったらそれよりかなり軽く感じる。ていうか、この子幾つなんだろう？俺が見てる範囲では一応年下と思えるし、14歳とかその辺なのだろうか。

「あ、あの。お身体は大丈夫なんですか？」

「大丈夫。ちよつとだけ気絶してたみたい」
ベッドにヴェルを寝かせて安否を告げる。

そして目の前で安心してゐる少女の頭を撫でてあげる、少しばかり強張っていた様子だったけどちよつとずつ緊張がほぐれる様に表情も柔らかくなっていった。

少し時間経って、ヴェルがベッドの上で座り直して俺を見据える。

「大魔法使い様、このような私を助けてくれて」

「ちよつと待った」

「え？」

キョトンとした顔で首を傾げながら俺を見てくる。

その仕草に少しだけ可愛く感じてしまったが、それよりも気になることがあった。

「その、大魔法使いつて何？私、知らないんだけど」

「…………えっと」

ヴェルは私の知ってる範囲でという言葉で大魔法使いとこの世界について話してくれた。

大魔法使い「マジックマスター」

この世界で、魔力や属性魔法を自分で生み出して身に着けて道具も要らずに自由自在に魔法を操る滅多にいない職。

世界のほとんどは道具や装飾品とかの魔力を借りて魔法を生み出したり、詠唱を使って魔法を生む杖や棒をを装備して魔力の媒介を武器に充てて生み出すのが主流となっていて、純粋な魔力を個人で持つて無尽蔵に生み出す魔法使いはいなくなつていったのだとか。

「そして、過去に起きた大陸戦争の日にその大魔法使い様が自分の魔法を使い、全ての戦争に終止符を打ち付けたという伝説があるんです」

「そう、なんだ」

なんだかヴェルの言葉がすごく生き生きしているような気がした。

黄色い瞳を輝かせながら俺がその伝説の大魔法使いの生まれ変わりなんじゃないか、

とか色々話してくれた。

「憧れなの？」

「っ！」

熱弁している少女にふと疑問を投げかけた。

そしたらその少女は少し固まり、頬を赤らめて目を泳がせて焦り始めた。

「いやそのっそういうわけじゃ無いんですけど！ほら、物語みたいな伝説で本当にこういうのになりたいなとかぐらいで、目の前の大魔法使い様には程遠いつていうかつ」
俯いてもじもじしてしまった。

そんな行動に少しだけ和みつつもヴェルは顔を上げてまだ少し赤い頬を向けながら

「大魔法使い様っ」

「……ノルンでいいよ。なんかこそばゆいし」

制止された言葉に意表を突かれている。

俺は頭を掻きながらその呼び方を訂正するように求めた。

「私はそんな大それた伝説の人じゃないし、この魔法のような力もさつき目覚めたばっかりだから違う」

「そう……ですか」

肩を落としてしょんぼりしてしまうヴェルを前にちよつとだけ罪悪感を募らせた。

ただ、この世界で魔力を自分で半永久的に生み出し魔法を出すというのが滅多にないというのは嬉しかった。

お任せの特典でついたものだけど、ちょっとだけチートじみてるような展開ではある。

前でしょんぼりしているヴェルを宥めながら気になることを聞いた。

「あの男が、ヴェルと一緒に暮らしている主人なの？」

「……」

さつき訪問してきた男について尋ねると、表情が曇り、青ざめていく。

縦に少しだけ首を頷くと、少しの沈黙の間

「私が暮らしている豪邸のご主人様です……名をリカン・フェイアスと言います」

「リカン・フェイアス」

少しだけ震えながらも口を開いてその主人のことを話してくれた。

ペリトよりも遠い都市「ラズリー」で有名とされているフェイアス家を継ぐ現当主。騎士道やその下で学ぶ教え子を持つラズリー騎士養成学校の理事長を務めている。

だが、それは表の顔で裏は人身売買の商人から奴隷の子を買っては自分の物として扱う残虐非道の人らしい。

王道中の王道で裏表ある権力者みたいなものか。

「典型的っていうかなんていうか」

「？」

「いや、なんでも」

その中でヴェルは抜け出せるタイミングをうかがっては飛び出し、この中小都市に逃げ込んできただとか。

ちなみに、日にちで2日かかったらしい。道理で、服がすぐくボロボロであることも頷ける。

「胸糞悪い話だね本当。憲兵とかそういうのには通報とかしなかったの？」

「通報した子はその中でいました。だけど、その後すぐ駆けつけてきた憲兵は主人の調査と言いつつその子の首を……」

と言いかけて、ヴェルは体を起こし膝を抱え込んでしまった。

つまり、憲兵とリカンという男はグルという話だ。

「こうなりたくなければおとなしく物でいろ。無駄なことをするな。と言われ憲兵にも言う事が出来ませんでした」

「……」

「もう、戻りたくないんです」

恐怖と怯えで血の気が引いてしまい震えが少し強くなったヴェル。彼女の姿を見てもう一度頭を撫でた。

小さく縮こまった少女はなすがままに撫でられていた。そして少しだけ震えが止まる。

残酷な数年の人生を歩んだその少女を見て、俺は見えられなかった。

何かを守ってあげたくなるような感覚、これが母性本能というやつなのだろうか。

「目覚めたばつかりの力で、どうにか出来るって訳じゃないけど。助けてあげるよ」
意表を突かれた言葉なのか、ヴェルは顔を上げて俺を見つめた。

黄色く濁った眼は少しだけ輝きを取り戻していた。

「ノルン様……助けてくれるのですか？」

「まあ、私もあの男思いつきり飛ばして標的になっっているかもしれないから。ついでにだよついでに」

それに、女の子をあんな風に扱うのは同じ男として許せんからな。

身体は女性だけど。

顔を歪め、俺の胸に思いつきり飛び込んで抱き着いてきたヴェルを受け止めつつ、感謝の言葉を言い終わるまで頭を撫で続けた。

「そーういや、ヴェルは年齢いくつなの？」

言い終わった後に胸の中で懐いている彼女に疑問に思ったことを言ってみる。

「14歳です」

「ぴったりだったか」

「それがどうかしましたか?」

上目遣いで聞いてくるので何でもないとはいぐらかした。

しかし、14歳ですか。そうですか、の割には小さいけどちよつとだけ発育いいよう
な気もするような

「何考えてんだ私!!!?」

「?!」

これも女性になったことの特権なの……かなあ?

少しだけ不安な出来事を予想しながら夜を明かしていった。

二章

小さな同居人

「洋服をどうにかしないといけないんだよなあ」

朝、ベッドで静かに寝息を立てて眠っている少女を置いて早く目が覚め、誰もいない静寂なりビングで眩く。

木製の椅子に座り、背もたれに体を預けながらそんなことを思ってた言葉にしていた。

ヴェルを匿い、助けると言った数日から今日まで策をどうするかと悩んでいた。

この中小都市では、フェイアス家についてのことや学校の話をあまり聞かないらしい、と出店で野菜や果物をたたき売りしていた頭巾被ったおばちゃんからの話だ。

それともう一つ、考えなければならぬことがあるのだ。

この静寂に響いた事についてだった。

「家にあの子にぴったりのサイズの服がない訳だし、ヴェルも私はこのままでもいい

ですよとか遠慮しちやつてるし」

節々の穴から少しだけ見える少女の肌とか人の手によつて出来た傷跡やミミズ腫れとか色々な意味で、落ち着かない。

外見は女性といえど中身はごく普通の25歳の男性なのである。

一応、寝る時は必ずあのボロくなつた服ではなく、あの少女がまるまる入つてしまふぐらいの装備屋の防具一覧の棚にあつたローブを買つては着させて寝かせている。

「おはようございませ……」

リビング奥から眠そうな声でとととと歩きながらヴェルが来る。

ローブも着ているおかげで、頭以外の身体は全て隠れているので大丈夫そうだ。

「よし、今日も見えない」

今の姿のヴェルをじーつと見て思わず口にしたら、疑問符でも浮かび上がるような不思議そうな顔で首を傾げられてしまった。

「ノルン様。今日はどうしますか?」

テーブルを挟んだ向かいの椅子に座って尋ねられる。

やや不安そうに見つめてくるヴェルの視線が少し気になるが、今日こそは後回しにしてしまったことをしよう。

「今日こそはヴェルの服をどうにかするよ」

「私は別に、このローブだけでも嬉しいですしこのままでも」

そんなのはダメに決まってるでしょう。

と反論しかけたところでローブの襟を少し寄せて頬が緩んでいるのを見て止まってしまう。

いやいや、それは違うでしょ。

必死で首を振る。

「そうじゃなくて!これからまた外に出る時に、ひよんなことからローブの中が見え

たらどうするの」

「それは……えーと」

どうやらヴェルにも恥じらいはあるようだ、少しだけ言葉に詰まっている。よかつた、この子にも一応理性が残っていたようだ。

「た、確かに困りますね」

顔を真っ赤にして小さくなって照れてそう呟いていた。

最初からこう言っておけば、理解してくれてたのかなと出会って匿うと決めた初日の俺を呪いたい。

「ヴェルも女の子なんだからその辺はしつかりしないと。とにかく、今日も外で服屋とか装備屋とかで探しに行ってくるよ」

ヴェルに留守番を頼み、今日もこの子に似合いそうなサイズの服を調達しに外へ向かった。

◇
玄関からノルン様の背中を見送り、扉を閉める。
そして私は今日も帰りを待ったためにリビングの椅子に座って犬のように待つ。

「……」

フエイアス家とは違い、こじんまりとした室内で最低限の物しか置いておらず、料理場の場所も私があの家から見えていた景色も全く違っていた。

ノルン様曰く、貴族のような生活とか贅沢な生活するよりもこういう実用的で動ける家でゆつくりくつろげる空間がノルン様の好みなのだとか。

「前までいた場所よりは狭いけど、なんか落ち着くかも」

目を閉じて、その唐突に来る安心感に身を任せて椅子の背もたれに体を寄せた。

私が前までいた過酷で残酷で残酷な家、リカン・フェイアスが主人の官邸。

この身をあの家に売られて奴隷として人々の命令を貰いながら当時はその生活を過ごしていた。

間違いがあつたら叩かれ、ストレスがあつたら呼ばれて鞭で打ち付けられ、家事も全部やらされて失敗があれば殴られる。

最初は泣いて泣きまくって死にかけた。

暫くその生活をしていた影響で、慣れた頃にはもうその感情ですら無くなって、物言わぬ体が出来上がっていた。

そんなある日、他の奴隷の子が近くの憲兵に助けを求めた。

私達は一人のその勇氣ある行動に安心して気持ちに楽になった。

もうすぐこの地獄のような所から解放される。

だけど、その安心はやがて絶望へと下り落ちた。

憲兵が家宅捜索でその勇氣ある子と一緒に来た時、リカンの自室に入った後から暫く

経ち、憲兵とリカンが部屋から出て来た。

だけど、その子が部屋から出てくる様子はなかった。

疑問に思った私はその部屋の入口を残りの子と確認した。

その目の前は赤く、鉄の強い臭いと共に誰かの死体と首が転がっていた。顔を見て分かった、あの子は勇気あった奴隷の子だということ。

その場で吐いた私の頭上から重い言葉が圧がかかる様に、そして鎖を付ける様に重く響く。

——こうなりたくなければ、大人しく従っている。無駄なことをしたら殺す。

「っは!!!」

息が苦しい、体が飛び上がり辺りを見回す。

そして、洗面所へ向かい胃から込みあがってきた何かを口から出した。嗚咽が止まらなく胃の中が空になってもそれは止まらない。

ようやく落ち着いた時には、その場でへたり込んだ。

足に力がいらない……私はそれでも体を引きずり、リビングへ戻る。

「ノルン様に心配かけちゃ……だめ」

体に鞭を打ってきつき座っていた椅子に戻り、身体を寄せる。

あの後すぐに、不意をついてラズリーから飛び出しこの街にやってきてノルン様と出会った。

そして、ノルン様は私がこの前に読んだ大魔法使い様が活躍する伝説の本の中にいる大魔法使い様で助けてもらってそれから、この薄いけど暖かいローブをくれた。

「早く帰ってこないかな……」

そう願っていたら、きつと一人でいるこの時間が紛れる気がした。

*

装備屋は街中では一か所しかない。

そのためなのか、服屋とかの発展は少なく前世であった洋服とかは滅多にない。

防具の棚の一覧にあるローブなどを品定めしながら種類の無さに少し悩んでいた。

ちなみに、俺の今着てる膝下スカートと上着とインナーは母親に頼みこんで作って

貰ったお手製の物だ。

素材はちよつと高かったらしいとか。

「うーうーん、一応身体を隠せるものならこれかなあ」

藍色の布製のローブを広げながら顔をしかめる。

あと、ヴェルは下着を着けていない。

前の主人は自分の趣味を露呈しているものだな。

「リカンって野郎、さてはロリコンだな？」

「その嬢ちゃん。今リカンって言わなかったか？」

不意に声をかけられて振り向くと、装備屋の店主で無精髭の黒髪単発の渋い男性だった。

「知ってるんですか？」

「知ってるも何も、俺はラズリーの出身からここに来た者だからな。あいつの黒い噂は聞いてるぜ」

意外な場所からの情報がまさかここで手に入るとは思わなかった。店主さんがラズリーの産まれということらしい。

「そうなんですか？」

「そいつがどうかしたのか」

ヴェルの事を濁しながら店主さん……いや、顔がおじさん顔だからオジさんって呼ぼう。

その事を話した。

「人身売買の噂ねえ、そりゃ案外当たってるかもしんねえな」

「それはどういう」

詳しく聞くところで、手を前に出されて静止されてしまった。

「詳しく知りたいなら、直接ラズリーに向かうといい。俺はこれ以上言わずここで働くことにしたからよ」

オジさんの少しばかり影のある言葉を最後に、
ついでに手にしていた藍色のローブも買った。
店を出ることにした。

旅の始めは準備から

装備屋から離れ、自宅に戻り玄関から入るとヴェルがリビングの方から出迎えてきた。

そのタイミングで今日買ったロープを渡すと嬉しそうに抱きかかえ、お礼をして自室に戻っていく。

「直接ラズリーに、かあ」

オジさんに言われたことを脳内で反芻する。

確かに、リカンがいる都市に向いて調べた方がいいのかもしれない。

ペリトよりは情報が沢山あるし大都市だから人口も多い。

自室に戻り、観音開きのクローゼットを開けながら考える。

「確か、遠いんだっけ」

ヴェルが2日かけてここに来たと言っていたから、かなり歩く距離ではありそうだが、悩むのは止めよう。

ヴェルを助けるための手がかりや重要なものがそこで手に入るのなら行くしかない。

「よし」

「ノルン様？」

俺の心が決まった所で、自室の扉から声が出たので、その声の主の部屋の扉の隙間から顔を覗かせている少女に振り向き目を合わせる。

その後には部屋に入り、今の俺の行動に少し戸惑っていたようだ。

「私、ラズリーに行ってヴェルを助ける手段を考えてみるよ」

大都市の名前を言われたヴェルは数秒硬直して言葉に詰まっていた。

だが、その後すぐ何かを決心したような目で俺を見てきた。

「私も……私もラズリーに行きます！」

「でも、その都市から逃げてきたんでしょ？この家で待つていた方がいいんじゃないかな」

ヴェルは奴隷が嫌で逃げる様にここに来たのだ。

それで戻つてしまうとまた同じように捕まつてしまうのかもしれないし。

ここでゆつくりと俺の帰りを待つていた方がヴェルも戻らずに済むのでは。

そう思ったが、その考えは少女に抱きつかれ揺らぎ始めた。

「数日間ずっと一人で留守番して寂しいんです。それでもし、ノルン様が何かあつて帰らなくなつたらつて思うと私……」

「ヴェル……」

自宅に匿つてから数日、確かにこの子と一緒に外に出ることはなく少女の御身優先にして意図的に留守番をさせていたのだが、寂しさはその事情で紛らわすことは出来なかつた。

そういや、俺もここで一人暮らしを始めた1ヶ月間は寂しかったっけ。

「わかった。一緒についてきてくれる？」

「っ！……はいっ！」

明るく笑顔を見せてくれた少女を、新しい二人目の仲間として迎えることになった。大都市へ向かう仲間が増え、その子の頭を撫でつつその支度をするべく準備を始めた。

ある程度の荷物をまとめた頃には日が真上で最大の照りを出していた。俺とヴェルは、旅に出る準備をした後にリビングで昼食を取る。

「そうだ。ヴェルはここで冒険者ギルドの方で身分の登録とかして外に出られるって制度知ってる？」

「そんな制度があるんですか？」

大都市ではそれが当たり前と、一度ギルドの受付の人に聞いたことある。

旅や冒険をする時にその身分登録したカードが無いと都市でその制度を用いている場所は基本入ることは出来ない。

その他にも通行証とかが存在するらしいのだが、商人という職の人が基本持っていること前提とか。

前世の言う運転免許証とかそういうシステムらしい。

「それがないと基本外で厄介払いされるんだってさ。だからこの後にギルドに向かう予定だよ。ヴェルもおいで」

その言葉に頷き、黙々とパンを食べ進めた。

俺もそれに気を取られつつも、昼食を食べ進めた。

ヴェルって、少しずつ食べるんだなあ……小動物っぽいや。

*

冒険者ギルド内は至って静かな日というのではない。

受付前でパーティの誘いをするされる人とかもいれば掲示板前で依頼の品定めをしている人もいる。

休憩スペースで同士で話している人とかもいるなど様々で静かになつたことはない。

昼食を終え、ヴェルと冒険者ギルドに向かいその中で他の様子を見ていた。

賑やかだよなあ、ここ。

毎回入る度に思ってしまう。

「人が多いですね」

「そうだね。えつと登録所は、と」

特別依頼の受付の反対側の場所がそうらしい。天井から登録はこちらへという看板が垂れ下がっている。

俺とヴェルはそこへ向かい、旅に出るといふ理由で身分を登録するために受付して貰った。

「ノルン・アーネスト、ヴェル・スカリール。お二人様の冒険者カードをお作り致します。お間違いはありませんか？」

「問題ないです」

「では種族や職業鑑定の為、この魔道具に手を置いてください」

淡々としたお団子ヘアの受付の人から言われた平型の道具。

どうやら生き物の情報をこの平型の表にある画面に乗せて診断するらしい。レントゲン撮ったものを貼るためのボードのような感じだ。

その表面に左手を置き、読み込ませる。

次にヴェルにも同じように左手で読み込ませた。

その後すぐに受付の人が小さく驚きはじめ、俺を見たのは一瞬だった。

「ノルン・アーネスト……職、マジックマスター、種族人間。まさか伝説と謳われた職業がここにいるなんて」

「どうしました?」

「い、いえ別に。次にヴェル・スカリール。職は無し、種族人間。特例、奴隷……」

あれ、ヴェルの所で今度は冷たく軽蔑するような目で睨んできたんですけど。受付の人から無様に見える目をいただくのは、なんかちよつと変な感じがした。

「ヴェルさん。この奴隷についてなんですけど、ノルンさんの奴隷ですか?」

「違います!ノルン様はそのようなことをしません、むしろ助けてもらった恩人です」

「えーと」

「こちらこそ、本人おいて話すんじゃない。」

「そうか、登録されるカードにそれが出ちゃうのか。」

「そうなるよ、ラズリーに入るのは幾分厳しくはなるのか……？」

「受付さん。その項目って消すことは出来ますか？」

「二応、出来ます。その消す理由には何かおありですか？」

「ここでごまかすのも何か違うし、改めて俺の中で目的を固めたいというのもあるので受付の人に経緯とその理由を話した。」

「受付の人は真剣に聞いており、理解したような感覚で項目の所をいじってもらえた。」

「しかし、ラズリーにそのような裏事情があったとは知りませんでした。一応、冒険者管理協会の方でも題として挙げておきます」

「ありがとうございます」

「出来る受付の人だった。」

登録の方が終わり、名刺よりちよつとだけ大きい冒険者カードを受け取ってギルドから外に出る。

それから一度自宅に戻って、まとめた荷物を持ち家の中の戸締り等を確認した。

「そろそろ行くよ」

「はいっ」

玄関で2人並びながら扉を開け、自宅から離れる。

こうして俺とヴェルの最初の旅が始まった。

だけど、目的はヴェルを助けるだけのもの、目標が終わったらこのペリトに戻ろう。

街の出口を目指しながら歩く。

道中、後ろから追いかけてきた、さつき相手してくれたお団子の受付の人からヴェルに洋服をプレゼントしてくれた。

「私のおさがりですけど、使ってください」

「何やら何までありがたいがとうございます。えっと」

「コリユ・リンケージです。新たな冒険者さん、これから頑張ってくださいね」

コリユさんの見送りと前から丁度欲しかったプレゼントを受け取り、ペリトの街を出るのだった。

道中に一難は付きもの

街の出口の草道で、ヴェルにラズリーまでの道順について尋ねると淡々と答えてくれた。

ラズリーまでの道のりは少し険しいらしく、ペリトの近くから名づけられたペリト草原超え、暗い森を抜けて湖を超える。

そこまでの距離でかかるのは2日ほどらしい。

「途中で野宿とかしてゆっくり行こう」

「そうですね。歩くとなるとかなり体力要りますから」

歩きながらヴェルと先の事を話した。

ちなみに、ヴェルの服装は、俺が買ってプレゼントした藍色のローブとコリュキさんがくれたプレゼントの中身の空色のシャツ、下はスカートではなく布製の青いズボンを履いていた。

スカートじゃないのには理由があり、ヴェルの顔以外に傷跡が少し目立つところに存

在しているのでそれを隠すように服装を選んだ。

これならあまり目立つこともなく、見た目からした冒険者の仲間の一人と言っても大丈夫そうだ。

草原を抜ける途中、休息がてらに少しだけ魔法の練習もした。

ヴェルに荷物を任せ、広大な草原の中央辺りで目を閉じ体の奥から湧き出すものを再び引き出すように感じ取る。

「今だ！吹き飛ばー！」

引き出したそれを表に出すように手を前に出した。

と同時に、突風が訪れ奥に行くように吹き荒れた。

「魔力を使つて風魔法を生み出したんですね！流石ですっ」

後ろで称賛の言葉をヴェルが挙げていた。

さっきのが風魔法なのか、そして湧き出るこれが魔力というものらしい。

「……なるほど」

その後は魔力を自在に操れるように練習をした。

数回風魔法を放った後にコツは掴み、威力の抑制をつけられるようにもなった。

そこから更に何回かすると、身体に疲労感が急に襲い掛かってぱたんと倒れた。

「ノルン様ー!?!」

無尽蔵に生み出すとは言え、魔力の生成が追い付かないまま魔力のガス欠を起こすと身体に負担がかかる。

これも勉強できた証として身に覚えておこう。

心配そうに顔をのぞかせるヴェルを見ながら瞼が重くなり、そのまま眠りについた。

意識が再び覚醒した頃に瞼を開き、草原で寝込んでいた身体を起こして近くで荷物番をしていた仲間を呼び、再び歩き始める。

日が少しだけ傾き始めていたので、歩を早めた。

というか、魔法が使えるのならば空を飛ぶことが出来るのでは？

「ヴェル。空を飛んで森を抜けよう」

「ほえ？」

キョトンとしたヴェルをよそに、すかさず魔力を使って試してみる。

魔力をヴェルと俺の身体全体にまとわせ、浮力を作り出す。

重力に逆らうように少しずつ地面から足を離していき、不安定ながらも距離を開けていった。

「わ、わ。飛んでる、飛んでます！」

隣で空まで浮かんでいることに驚いたヴェルの手を取り、魔力の調整をする。

落ち着いてきた頃には地上から数十メートル離れた距離まで開けていた。

これなら2日程ではなくもつと早く着きそうだ。

「大丈夫？」

「へ、平気ですつ。ちよつとだけびつくりしました」

流石大魔法使い様です。

と嬉しそうに頬を緩ませて言ったヴェルの手を引っ張り、そのままラズリーの途中にある大森林の上を抜けるように飛んでいった。

*

ラズリーの道中の大森林は、空から見下ろしても広大で迷いやすく、緑豊かな木が沢山生い茂っている。

時々、夜になると狂暴な魔物とか徘徊したり、狼の遠吠えなどが聴こえるのだとか。

その大森林の上を飛行しながら数時間経過、空が暗く星が輝き始めていた頃は未だにその終着点が見えてない。

どれだけ広いんだこの森は。

「うーん。湖が見えないなあ」

「もう少しで森の先が見えてくるはずなんですけど」

隣の少女は少しだけ表情を曇らせる。

道なりは合っているはずなのに、出口のようなものが何一つ見えてこない。

これな何かおかしい気がする。

飛行を止め、空から森林の周りを見渡した。

その瞬間、真下からキラリと光った物が俺に向かって飛んできた。

「うわっ！」

咄嗟の出来事に回避は出来なかったが、反射神経をフル稼働させてなんとか身体を捻り命中を避ける。

左足にかすり傷が出来てしまったが、逃げられない程という訳ではない。

だが、魔力の途切れを感じ2人のまもっていた魔力が切れて、そのまま重力に引っ張られるように地面に落ちていった。

「ヴェル！体をこっちに！」

「はいっ！」

ヴェルの身体を寄せて、地面に向かって風魔法を放つ。落下するスピードと相殺しながらゆっくりと降下して森の地面に着地した。

「なんとかなった、危なかった」

「……危うく死ぬところでしたね」

魔法を使っていなければこのまま2人で地面に衝突して即死だった。

息を整え、お互いの安否を確認する。

それをするの束の間、先程飛んできた物が同じように狙うように飛んできた。

「つと。二度目は食らわれないっての！」

今度はそれを見切れるぐらいの余裕があり、風魔法で跳ね返すようにそれを阻止する。

威力を失ったそれが地面に落ち、正体を確認すると、鋭い矢尻を持つ木製の矢だった。誰かが俺達を狙っている？

同じような風景の森の周りを見る。

するとその正体を表すように奥の木から人影が飛んできた。

「死ねええええ!!」

俺より同じくらい的身長で耳が横長の人物が鉄製の槍を持ち襲い掛かってくる。

後ろに飛んでその襲撃を避け、ヴェルを俺の後ろに隠れさせた。

「危なっ!?危ないじゃんか!!」

「黙れ!我が娘を攫っていった欲深き人間め!今ここでこの地の肥料としてくれよう!!」

間髪入れずその槍の矛先を突き出してきた。

必死でそれをなんとか避けるが、左肩にかすってしまった。

怒りにまみれたその表情を見せる人物をよく見ると、RPGやオンラインゲームとか出てくるエルフという種族の類だ。

まさかこの目で見られるとは思わなかった。

と心の中で感動しているのも一瞬、ヴェルを匿いながら防戦を繰り返す。

凄まじく猛攻する槍裁きに避けることしか出来ず、避けきれない時に次々と身体に傷が出来始める。

後ろでヴェルが泣きそうに声を上げているが今はそんな余裕はなかった。

「防ぐことしか出来ないのか人間め！」

「そつちこそ、敵意はないのに無差別に攻撃する種族がエルフという物なんですかね……！」

その挑発でエルフと思わしき人物の額に青筋が入った。

そして距離を取り、再び槍を構える。

「余程死に急ぎたいようだな。ならば潔く死ね！」

地面を蹴って突撃してくるエルフ。

槍の先に全身の力を籠っているのでスピードはめっちゃくちゃ速い。

だが、俺も無策ではなかった。

「その攻撃を待ってたー！」

ヴェルと俺を纏うように風魔法で壁を作る。

エルフはその厚き壁に突撃するが、威力を失いその場で止まった。

そして動き止まり困惑したエルフのその顔にめがけて

「食らええええ!!」

風魔法で威力を乗せた右ストレートをお見舞いし、エルフの身体を思いつきり殴り飛ばした。

地面にその身体を乱暴に着地して動かないエルフの近くまで来て、身体をつつく。どうやらそのまま気絶しているようだ。

「勝った……疲れたあ」

「ノルン様つ、今手当します」

伸びている敵から少し離れた場所で座り込み、ミニバッグから包帯と薬草を手を持つ

て手当してくれるヴェルを見た。

回復ポーションを魔法店から買えば良かったのだが、資金的に用意できなかった。なので、家にあつた緊急セットを持っておいてよかった。

「ありがとう、ヴェル」

気の利いてくれる仲間の頭を撫で不器用ながらも優しい治療を受け、身体を休ませた。

「今日はもう遅いからここで休めなきゃね」

「はい……」

流石にあそこで伸びている奴がまた起き上がって戦うとなると死を覚悟する。ヴェルもそれを考えていたのか、同じ方向を何度もチラ見しながら不安そうに見てきた。

「大丈夫。次は襲ってこないと思うよ」

「どうしてですか?」

顎に手を添えて少し考える。

考えて数秒後。

「女の勘、かな?」

「勘……ですか」

困惑されてしまった。

手当を終え隣に座り身体を寄せてきたヴェルと共に、程よい疲労に任せながら目を閉じる。

そこから意識は暗闇の世界へと放り出された。

大森林での事情

パチパチ、と何かを弾ける音がして目を覚ます。

視界には焚火が広がり、暗い森の中で少しだけ明るくなっている。

意識が少しずつはつきりしてきた。

瞼を少しずつ開け、目の前の景色を伺う。

「起きたか」

そこには倒れていたはずのエルフがそこにいた。

咄嗟に距離を取ろうと図るが、右隣で寝ているヴェルの存在に気づき留まった。

「もう危害を与えるつもりはない」

「……………どうだか」

低く細い声で無害を主張する相手を睨みながら警戒する。

声からして相手は男のエルフのようだ。

エルフは近くにあった枝を折り、燃え上がっている火に投げこんでいる。

「こうして助けるフリをして、寝ている間に殺すんでしょ」

「そこまで非道なほど、種族の長として落ちぶれていない！」

警戒を解かず卑屈を述べた言葉に声を荒げ俺を睨みつけてくる。

静寂な森の中で大きく響くその声に少しだけ驚いてしまった。

そして、俺の太腿を枕にしているヴェルがもぞもぞと起きそうになっているのに視線を移すと、そのエルフも荒げた声の音量を下げた。

ヴェルの頭を撫で、再び寝かすとそのエルフは口を開いた。

「殺しは一切しない。お前らは奴らのような非道たる人間とは全く違っていたのがわかっただけ」

「……ふーん」

「魔道具に内蔵された魔力に反応する結界をこの森林で大きく張り巡らせ、感知した人間を襲撃していた」

大規模の結界を張り、娘を攫った人間をその中で探して首を狩るのが目的らしい。娘を攫った人の特徴には、強い魔力を持った魔道具の持ち主だそうだ。

「だが、お前らには魔道具は無く、純粋な魔力を持った魔法使いであることがわかった」

その間違いをここで詫びる、すまなかった。

と、男のエルフは俺に頭を下げてきた。

つまり、風魔法で2人で飛んでるところに結界に引つかかって間違つて襲われたということ？

迷惑にも程がありすぎる展開だ、現世なら暴行罪とかで訴えてもいいレベルである。わざとらしくため息を大きくついた。

「わかりました。死にかけたけど、勘違いで襲われたってことにしときます。後でヴェルにも謝っておいてください」

「善処しよう」

エルフは申し訳なきと謝罪を込めた気持ちで返事した。

それから少しだけ沈黙の時間が過ぎる。

エルフは頭を上げ、焚き火に再び薪を投げる。

俺はその燃える光に照らされている顔をよく見た。

横顔からでも見える、しっかりと整っている顔立ちで美形と呼ばれる部類だ。

髪色は外が暗いからなのか暗みを帯びた色になっているが、明るさがあるところでは

金髪と見えるくらいの色で綺麗である。

服装も無駄のない布製の一式を着ている。

なるほど、イケメンという感じか。

身体も少し長身で俺よりはありそうだ。

相手の姿を確認していると、視線に気づいたのかエルフはこちらを見てきた。

「何か？」

「いや、エルフは本の中での種族だけって思ってたので、本物を改めてみると人とは違うなーと思いますよ」

「そういうものか」

表情を動かさず素っ気ない言葉で返される。

そして、少しだけ沈黙が訪れる。

どうしよ、話が続かない。

表情をあまり見せないから何考えてるかもわからないし、ちよつとしたことを話そうとすると返事が大体素っ気ない言葉で返されてしまう。

何かないものか。

「……お前らは、大森林を超えてどこへ行くつもりだ？」

自分自身で話題を作ったり練り上げていると急な言葉が沈黙な空気を割いた。

「ラズリーに行くこうと思ひまして」

「あの大都市のラズリーか。観光とかいうものか？」

首を振り、幸せそうに眠っているヴェルの頭をなでながら答える。

「この子を助けに行くためにラズリーへ行きます」

このエルフは目的の事を話してもいいだろう、邪魔をする気はなさそうに感じたから。

「私はこの子に負担になつてゐる奴隷を解放するべく、手がかり求めてペリトから来た冒険者。それでこの道中で貴方と出会つて、今こうして話してる訳です」

「奴隷……傷など見当たたらぬが」

怪訝そうな顔で俺を見てくる男に、ヴェルの右腕を少しだけ曝け出した。

「ごめんねヴェル、後で何か買ってあげるから。」

心で小さく謝罪し、エルフにその傷痕を見せると、エルフは納得いったような表情でため息をついた。

「なるほど。時々この森林に連れてくる人間の中で雑に扱つてゐる連中の仲間か」
「淡々と言いますね」

恨んでいる連中と同じ種族だからなのかどうでもいいのか。

そんな卑屈な言葉が浮かび上がる。

しかし、エルフはどこか切なそうに顔を変えていた。

「そして、自決した仲間の一人か」

え？

突然の言葉に卑屈な思考が止まった。

間髪入れず、そのエルフは語る。

「攫った人間の中に奴隷と呼ばれる連中がいたんだ。だが、その内の一人が自ら主人であろう男をかばい死んだ。ただ、あれは無意識ではなく意図的にだ。そして撤退後に置いてけぼりになったその子は俺にこう言ってきた」

ありがとう、やっと救われる。

そう言つて息絶えたらしい。

「……」

「あの時の奴隷の子はおそらくラズリーの連中の一人なのだろう。そして奴隷はその価値でしかない下の存在とも言える。それでも、お前はその奴隷の子を救うのか？」

正直、身体に少しだけ震えを感じた。

「ただ、ヴェルの幸せな寝顔を見て震えはなくなり、揺らいでいた心もまとまっていた。」

「助けるって決めましたし。私はこの子の大魔法使いですから」

*

「この先を抜けると森の出口に繋がる。結界もその辺りだけは解いておいた」

朝。

眠っているヴェルを背中におぶりつつ、エルフの道案内を聞きながら森林を抜ける。道順に沿って歩くと先が広くなり始め、地平線より手前に湖が見え始めた。

「ありがとうございます。エルフさん」

「トーガ・ツアイヴ、俺の名前だ。お前は？」

「ノルン・アーネストです。道案内ありがとうございます、トーガさん」
軽く一礼をして、森の出口へと歩を進める。

……はずだったのだが。

足を止め、見送っていたトーガの所まで戻る。

「ちなみに、娘さんの名前を聞いてもいいですか」

「構わないが、何故だ？」

俺自身でもなぜこの行動を取っているのかはわからない。

だけど、何故かトーガの事を放っておけなかった。

「助けるついでに娘さんを探しておこうかなと思って」

「……ありがとう」

その時、俺は心の中で不意を突かれ見惚れてしまった。

トীগは俺に少しだけ笑みを見せたのだ。

その笑みはとても綺麗でかつこよく、そして――

あれ？なんでこの笑顔に見惚れてるんだ？

首を全力で振り、ときめいた心を元に戻した。

奇抜な行動に目を丸くしていたが、すぐさま顔を戻してトীগは告げる。

「アナ・ツアイヴ。覚えていて欲しい」

「覚えておきます」

再び一礼をして、踵を返し出口へ向かった。

頬の熱さが少しだけ残ってる気がするけどきつと気のせいだ。

日の強さで顔が少し赤くなっているだけ、きつとそうなんだ。

「中身の男が惚れるわけないだろ」

そう言い聞かせて次の道の湖へと出発するのだった。

湖にいる精霊さん

湖といえ、青く澄んだ色で水も冷たく、場所によつては飲める水という所もある。夏にプールとは違うくらいの広さと温度の低さで泳いだり、水面近くから釣りをして楽しむ一興も出来るくらいの自然が生み出したものだ。

森を抜けた先から獣道を通り近くで見えていた湖までたどり着き、背負っていたヴェルを起こす。

俺の耳元で少しだけ呻き目を開け正面を見る。

「湖着いたんですね」

「そうだね、ここでようやく半分なのかな？」

ヴェルを降ろし、水面付近まで足を進めしやがみ込む。

地面との境目で揺らいでいるのを見ながら、その水を手で触る。

今の季節はわからないけど、夏に近いのだろうか水が丁度良い温度で感じていた。

「朝ごはんにしよっか」

湖に釘付けになっていたヴェルを呼び、湖畔に座り、朝食の準備をした。

簡単な物で済ますために、大きめの柄模様のスーツケースから長方形のバスケットを取り出して、蓋を開ける。

視界に見えたサンドウィッチを一つ取り出し、ヴェルに渡して食べ始めた。

「ノルン様の手料理は本当においしいですね」

「昔に一度作ったことあったのを思い出しながら作ったただだよ」

本当はこの世界の母親の手元を思い出しながら見様見真似で作っただけだね。

嬉しそうに食べるヴェルを横目に俺も手元にあるサンドウィッチを食べながら湖の先を見た。

奥側の水面が太陽の光の反射でキラキラと輝き、濁りの少ない水中からはそこそこ大きい魚が元気に泳いでいる。

朝食を先に食べ終えて両腕を上には伸ばして背中を伸ばした。

この場所でゆっくりと休息を取れそうだ。

「流石にもう誰も襲ってきたりとかしないよね？」

「もぐもぐ……大丈夫かと思えますよ。この先すぐ目的の場所ですから」

隣で小さな口で少しずつ食べているヴェルが答えた。

湖を沿うように出来た道を辿ってすぐに城壁が見えるらしい。

途中でもその一部が垣間見えるのだが、開けた場所ではない湖畔の隅なので見れないとか。

「なので、すぐと言っても、もう少し時間掛かりますよ」

「そうなんだ」

歩きで時間かかるというのなら、湖を突っ切ればもしかすると早いのかも知れない。その手段を俺は持っている。

「ねえ、ヴェル」

「はい？」

「ここを飛んで湖を突っ切っていけば、短縮するよね？」

*

湖の全貌を見る様に真上に一回風魔法で飛んで、そこから高さを調整しつつ水面から少し離れた場所で浮遊する。

もちろん、ヴェルも一緒に手を繋いで飛んでいる。

そこから低空飛行をしてゆつくりと今いた湖畔から向かい側の方へと近づいていった。

「そうだ、少し遠回りしようか」

途中で方向転換をして湖の縁を沿う様に飛行する。

ヴェルが少し驚いたり、水面から魚影を見て泳いでるところを見ては感動もしていた。

「前までは、こういうのは見れなかったの？」

ヴェルは頷く。

「奴隷の頃はずつと部屋の中でしたので、こうしてノルン様と外で色々なものが見れてとても嬉しいですっ」

子供のように無邪気に喜んで楽しそうにしている。

釣られて俺も楽しくなってきた。

水中の様子を上から覗いて自由に空を飛び、湖の大きさを改めて実感している時だった。

「そこの飛んでいる冒険者、止まれ!!」

空中から聞こえてきた高めの声に飛行を止め、湖の中心に丁度良く留まった。

今の声、何処から聞こえて来たんだろう。

辺りを見渡しても広大な景色だけしか見えない。

すると目の前の水面が激しく揺れ、影が浮かび上がる。

そして、その大きさは徐々に広がりやがて水飛沫を上げて飛び出してきた。

そこには露出のあまり少ない水着姿をした女の子が水面から足つけずに立っていた。

「（こらこら、湖で遊んじやいけないって両親から教わらなかったの?）」

「……」

「ていうか、冒険者なら危険を顧みずに飛んじやいけないでしょ。さつさと地面ある所に戻りなさい!」

「……………」

「ねえちよつと聞いている? ねえつてば」

「ノルン様?」

瞬きを繰り返す。

そしてヴェルに呼びかけられて我に返った。

身長は俺より少し小さいだろうか、水色のしつとりとした髪で両側に一つずつまとめ上げられていて、所謂ツインテールで水色の瞳で少し釣り目の女の子。

ジト目でこちらを睨んでいたの、すかさず返事をした。

「精霊様でございますか？」

「!? 何故この偉大な私が精霊だつてことがわかつたの!？」

偉大な精霊は驚愕し身体を仰け反らせた。

こういう姿をした子は、主にRPGの中盤とかでも見た精霊の服装で少し思い当たりがあつた為だ。

ちなみに後ろでヴェルも驚いていた。

「あー、えつと。なんとなく？」

「なんとなくつてあなたねえ……いやそうじゃないわー！」

ペースに？まれまいと精霊は立て直し、指をさしてきた。

「早く戻りなさい！でないとあんた達の冒険者の魔道具を全部奪うわよ！」

そして語気を少し強め、俺の身体を嘗め回すように見てきた。

単に、向こう側のラズリーの入口付近の先に向かいたいただけなのだが。

話を聞いてくれるかわからないけどとりあえず説明しよう。

「いや、ラズリーに行きたいだけなんだけど」

「……ラズリーですって？」

今度は眉毛を引くつかせ殺意ありそうな目で睨みつけた。

あれ？なんかこの子表情がころころ変わって面白い。

そう思うのも束の間だった。

「あんなクソみたいな街の住人だったのね!!絶対にこの先は行かしてやらないわ!!

さっさと帰りなさい!」

「とは言っても用があるんだし、引けないんだよね」

「絶対に駄目!」

強情にも程があつた。

聞き分けのない子供を相手してるようで少しだけイラついた。

いや、落ち着け。

俺は、中身は25歳の男で大人なんだ。ここは大人らしく毅然とした態度で済ませなきゃならない。

「……吹き飛ばすか、この精霊」

「ノルン様!?!」

身体が言う事聞いてくれませんでした、何故だ。

魔力を身体から引き出しつつ、それを空いている左手に集中させ風魔法の弾をを作り上げる。

精霊はそれに気づいたのか、臨戦態勢を取る。

しかし、その魔法を見て顔が少しづつ青ざめていった。

「魔道具無しで詠唱なしの魔法ですって?……え、まさか」

臨戦態勢から一変、ノーガードになって無防備と化す。

俺の姿をもう一度見詰め、そして

「大魔法使い様……!?」

俺の職を叫びながらその場で素早い土下座をした。

咄嗟の出来事に貯めた魔力を戻し、土下座で頭をずっと下げている精霊を見つめた。
というか、そんなに偉大なのか大魔法使い。

「先程の無礼をお許しください！送還だけは、送還だけはご勘弁をっ！」

「えーっと。ヴェル、これは一体？」

「は、はいっ。精霊は大魔法使いに仕えてた時代もあったと以前の伝説の本の一部で
そのようなことが書かれてました。そして、それぞれの祀り物の場所を作って精霊を自
由にさせたっていう一説があります」

つまり、俺は今この精霊を自由に言いつけることが出来るって訳だ。

「……へえ」

「ノルン様、お顔がとても怖いですよ」

隣で怯えているヴェルを後に、さつきまで邪魔してくれた精霊をどうにかしてやろうか。

イラつきもそこで再び蒸し返してきた。

「この大魔法使いの行く道を遮るなんて、偉そうになったもんだねえ？ 精霊よ」

「ひいつ！」

「その非道たる行い、我が命を以って下す」

ガタガタと言わんばかりの左肩に手をそつと添える。

精霊が敏感に反応して縮み込んだ。

そして無理やり顔を上げさせて完全に怯え切った目を見つめる。

「お咎めなし！」

「へ？」

呆然とする表情をしている精霊さん。

よく考えたら、俺は昔の人じゃないし。

精霊を虐める様な思考も持ち合わせてないからな。

「聞こえなかつた?」

「い、いえ! 慈悲深い言葉ありがとうございませう!」

助かつたあ。

と緊張が一気に解けたのか、目の前で精霊がへたり込んだ。

後ろでヴェルも称賛の言葉をあげていた。

「そもそも、そんな加虐趣味ないし、あとそんな堅苦しい言葉はいいよ。さっきの口調で全然いいから」

「そ、そう? 変にへりくだった言葉は疲れるからそっちの方が助かるわ」

気楽になつた途端に強気になる辺りはちよつと気に入らなかつたけど、怯えながら話されるよりはマシだろう。

その精霊を立ち上げがらせ、とりあえず話をすることに湖のほとりまで飛行するのだつた。

湖の祀り物

最初にいた場所から飛行でヴェルと精霊の2人とラズリーの城壁がぼやけて見える位置のほとりまで到達して、地面に着地してから魔法を解く。

続くように精霊も大地に着地したため息をついていた。

大都市の近くまで来ると、ここから目的地の面影が見えている。

城壁の高さで内部からの高層部分は見えてないが、拠点としていたペリトよりは遙かに大きさが違うのがわかった。

「本当にラズリーに行くの？大魔法使い」

「目的あるし、情報収集には大きいところがいいでしょ？あと、ノルンでいいよ」

怪訝そうに見つめて問いてきた精霊の隣で返事する。

最悪、何かあれば魔法で吹き飛ばしたり飛行して逃げたりも出来るから問題ない。

強気でそう伝えると再びため息をつかれてしまった。

「まあノルンがそう言うならいいけど、でも最近あそこから不穏な空気とか感じるのよね」

「何かヤバイものいるとか」

「そこまではわからないわよ」

湖と都市の距離はちよつと離れてるから内部までは分からないみたいだ。

だけど、ラズリーには何か起こつてるといふことは顔をしかめて何かを考えている精霊の姿を見て分かった。

これはちよつとだけ骨が折れそうな雰囲気だな。

「……ねえ、ノルン」

「何?」

ふと、精霊に呼びかけられた。

振り向いた先の精霊は何か企んでそうな顔を見せ少しだけニヤついて、ヴェルを奪取した。

「えっ」

「ええ!？」

「ちよーつと、手伝って欲しいことあるんだけど。いい?」

人質に取られてしまったヴェルは唐突な出来事に驚いて目を丸くしている。

おい、俺の仲間は何をするつもりだ。

にんまりと言い終わった精霊の顔に向かって風魔法の弾を投げつけー

「あああああ!待って真顔で魔法撃たないで怖い怖い!!私の住処がその空気で作られて大変なことになってるから直して欲しいだけなんです!だから撃たないでえ!」

ようとして、犯人が一瞬で顔を青ざめて冷や汗流しながら早口で白状したところで身体が止まった。

全く、人騒がせな。

「ラズリーからの刺客かと思ったじゃんか」

「死ぬかと思った……」

やる方が悪い。

そう告げると精霊の腕から解放されていたヴェルも同調してくれた。

悪戯好きなんだろうか、この精霊は。

「で？住処って何処よ」

「案内するわ」

踵を返し、湖沿いを伝いながら小道から少しだけ開けた場所へ着いた。

それから更に歩き、林の間を通過して小さな洞穴を見つける。

その奥から少しだけ見えている祀り物というのが見え始める。

神棚のようなものだろうか、小石を積んだ山が3つでその中心に何かの石像が置かれている。

石像の形には三角帽子とマントのような大きいローブを着用したしつかりとした魔法使いの姿のようだった。

一見、なんともなさそうに見える石像だが、脚部辺りから黒ずみが侵食されている跡を見つけた。

「ノルン様、これが祀り物です。ここで精霊さんは住処として生きていますみたいですね」

「なるほどね」

洞穴全体が精霊の家としてなっているようだ。

後ろを向くと林で視界が少しだけ遮られているが、湖の中央が見える位置にある。精霊は、黒ずみがある石像を見ながら眉をひそめた。

「この石像が黒くなると、私がこの場所に留まれなくなって消えてしまうわ」

「そうなるよ、湖はどうなるの？」

「濁み始めて、魔物達の巣窟になる。大型の魔物とかも現れ始めて大変なことになるわね」

「そんな……！」

ヴェルがそれを聞いて絶望していた。

もう一度、湖の方を振り向く。

あれだけ綺麗な場所で澄んでいるのに一瞬にして汚れた沼のような景色に変貌する

ということらしい。

そして、魔物がラズリーへ侵攻して戦争になることも想像した。そうなると必然的に奴隷達が使われるのだろう。

「だからお願い、人助けならぬ精霊助けと思つて！」

「ノルン様、やりましょ？ね？」

ヴェルもその話を聞いて同情を誘い始めている。

悲しそう目で見られたら否定できないじゃんか。

仕方ない、ヴェルの為ということにして割り切ることにした。

「わかった。それで、その石像を綺麗にするにはどうしたらいいの？」

ヴェルがラズリーでちゃんと解放された後で住む時に魔物が近場にいられても困るだけだ。

精霊は顔を明るくさせ、その方法を伝授される。

その前に疑問を投げかけられた。

「えっと、ノルンは水魔法を覚えてる？」

「覚えてないと思う」

「条件に水魔法を覚えておかないといけないのよね。ってなわけで、はい」

目の前の精霊は、右手を指し伸ばしてきた。

何かをするんだろうか、それにつられるように右手でそれを掴む。

すると、俺の周りが光が少しだけ強み始め、同時に頭の中に水魔法の一覧がリストとなつて記憶され始めた。

「水の精霊デナ、大魔法使いのノルンに従い、契約することをここに誓います」
「すごい……これが契約なんですね」

ヴェルが憧れの目でこつちを見てきた。

その後もデナと呼ばれた精霊の呪文のようなものが少しあったが、やがてそれも終わり周りに出ていた光も力をなくしつつあった。

手を解き、早速水魔法を実践してみることにする。

両手を空気を包み込むような形で前に出し魔力を使つて念じる。

少しだけ集中し魔力を外に出したことを確認すると、両手の内側に水の球体が完成されていた。

「これが水魔法ね」

「契約完了したわ！さて、次はその水魔法を使つて石像に魔力を送つて欲しいの」

石像に指を差して頼みごとをしてきたので、それに従うがままに水の球体を石像にぶつける。

すると石像はそれに反応して発光し始め黒ずみを少しずつ溶かしていった。

光がなくなつたころには石像は真の姿を現し、綺麗な傷一つない別物となつていた。これが本来の姿なのだろうか。

「ありがとう。これで私もここに居続けられるわ」

「流石ノルン様です」

頭を下げられて感謝される。

ちよつとだけむずがゆく感じ頬を搔いた。

*

日が昇り、真上から少しずれた場所で太陽が止まつてる頃。

さっきの立ち話してたところまで戻り、デナは改めてお礼を言ってくる。それを受け止めながらラズリーへ向かう出発を告げ別れようとした。

「あ、待ってノルン」

呼び止められたのでその場所に止まり、向かってくるデナを待つ。

駆け寄ったデナを見ていたヴェルの所まで来ると、何やら呪文を呟いた。

すると、ヴェルの身体に残っている傷が腕や脚から垣間見えていた場所から消え始めた。

「回復魔法よ。これで傷跡もなくなってるわ」

最初の場所に戻る時、デナが道中でヴェルの身体の傷跡を気になっていたので本人に了承を貰い、事情を話した。

ノルンって鬼畜よね、とか冗談めいたことも言われたが終始ちゃんと聞いてくれて理解してくれた。

誰が、鬼畜奴隷魔法使いだったの。

そこからののだろうか、回復魔法を使って傷を治してくれた。

ヴェルも腕の傷がないことに驚き、デナに何度もありがとうと言っていた。

「いつてらっしやい、ノルン、ヴェルちゃん」

手を振って見送ってくるデナを背に俺とヴェルは本来の目的地である大都市ラズリーへ出発した。



豪邸内の執務室。

私は、目の前で退屈そうにしている大男を睨みつけていた。そして両側で甲冑の憲兵が私を逃がさないように拘束している。

「くっ……！離せ！離せと言っている！」

「少しは落ち着いて欲しいものだが」

「敵地で落ち着くようなことがあつてたまるか！」

殺意と怒りを込めた目で睨みつつも、鼻で笑われてしまう。

そして両側の憲兵に視線を送ると私の身体に数発殴りをいれた。

「かはつつ……！」

「もう5日目だというのに、未だにお前ら魔物達の拠点を言わないとは、強情な女だ」

男は冷えた目で睨みつけ、床に顔を伏せている私の髪を掴み無理やり頭を上げさせた。

「お前らの誇りとでも言うのか？なあ？」

ニタツといやらしく笑ったその表情は目が座っている。

そしてその口から私の名前を汚すように零してきた。

「エルフを治める族長の娘ア・ナ・ツ・ア・イ・ヴさんよお」

大都市ラズリー

城壁の前で憲兵達が通行証の確認をしている最中、行列となっている大都市入口付近で俺とヴェルは並んで待っていた。

そういや、ヴェルはラズリーから逃げた身だから指名手配で顔が割れてもおかしくはない。

そう思い、隣で緊張している銀髪の子の頭を覆うように三角帽子を被せた。

大きめのローブで身体も隠し通せてるところから、この子は俺の仲間で冒険者の一人でもあるように見えるだろう。

「ヴェル、ラズリー内は私の仲間で見習い魔法使いって体で行くよ。どこかで指名手配とかされてるかもしれないから一応ね」

「わかりました、ノルン様！」

様は付けなくてもいいんだが。

この子は見習いで俺は大魔法使いだから問題はないか。

行列が動き出してから時間が少し経つと、ようやく俺達の通行を確認する番となった。

頭部以外の甲冑を装備している憲兵の一人が必要な物を提示するように指示してくる。

俺とヴェルはそれに従ってカードを見せ通行許可を貰った。

ちなみに、ヴェルのカードは水魔法で少しだけカードの文字を霧で上手くごまかして『レブラ・ミストセレー』という名前に変えている。

城壁を超え一歩ラズリーに踏みいれると、そこはペリトとは違う景色が広がっていた。

「……すごい。ここが大都市」

あまりの衝撃に思わず呟いてしまった。

商業や住宅も先進国並みに文化が広がっており、人混みもそれに合わせて賑わいを見せている。

ただただすごい、それだけしか言葉が無かった。

「つと、感動してゐる場合じゃなかった。宿を探さない」と

ここにある都市の物に興味はあるが、本来の目的を忘れないためにも今日の宿を見つ
けなければ。

歩きを進めてすぐに大通りへとぶつかり、そこから宿のマークが記された看板を探
す。

ヴェルと手を繋ぎながらも他の物への関心を惹かれつつようやく見つけた宿は木造
の形のいい場所だった。

看板を掲げている扉に入り、すぐ手前にある窓口に進む。

すると、左側の扉から宿の店主さんが顔を出してきた。

何やら少しだけ若く見える感じがするのは気のせいだろうか？

「いらつしやいませ、お泊りですか？」

「暫く滞在するので長期間の泊まりになるんですが、大丈夫ですかね？」

「大丈夫ですよー！」

元氣そうで笑顔を絶やささない可愛い子だった。

「そうなりますと、前払いで金貨25枚になります」

「一人25枚？」

「はい、一人25枚です」

そして悪魔の微笑みでもあつたようだ。

先進国になるにつれて物価や定価も上がるんだろーなというのはこの異世界でも変わらないんだな、と痛感しながらも金貨50枚を支払い部屋に案内された。

*

2人部屋で間取りも広く、ベッドもちゃんと2人分用意されている完璧な寝室。

窓際の間取りを取りながら、ヴェルと俺はベッドで柔らかさを感じながらこれからのことを話す。

「1か月くらいでの滞在はここで出来そうだね」

「そうですね。それで、ここからどうしますか？」

顎に手を添えながら考える。

ヴェルの奴隷の解放とリカンをぶっ飛ばすことを目的として来てるが、その辺の情報を手に入れなくてはならない。

だが、ここは一応敵地でもある為、変に行動して目をつけられてしまえば情報を手に入れるのは難しいだろう。

そういえば、ヴェルからラズリーには騎士養成学校があるというのを聞いたことがある。

リカンはその理事長を務めているから、もしかするとその学校で手に入るかもしれない。

「学校に潜入して生徒達から聞いてみる？」

理事長であるならば毎日学校で執務等をしているはず。

だから生徒達とかの話で何か重要なものが聞けるかもしれない。
ヴェルはその案に賛成だった。

そうと決まれば早速行動しよう。

荷物をベッドの横に置き、ヴェルを連れて部屋を出る。

フロアリングの床を歩いて階段を降り、宿から外に出た。

後ろからお気をつけてと見送りをされたのはついでだ。

「何処から探そうかな」

「あそこからはどうでしょうか？」

大通りの枝分かれした道の一番右側を少女は指差して案内する。

地図も何もないからあてずっぽうで行くしかない、その後についてくように歩いた。
そこから住宅街へ道は出ており、人混みはさつきよりだいぶ少なくなっている。

「ここは外れかなあ」

「そうみたいですな……」

しょんぼりとして帽子を深く被ったヴェルを宥めながら元来た道へ踵を返す。

「お役に立てなくてごめんなさい」

「大丈夫。ここは広いからマツピング出来ると思えばだいぶ楽だよ」

「まっぴ、んぐ？」

こっちの話。と疑問多そうな顔をする少女に返した。

大通りへの枝分かれの根元が目の前まで見えてきた時、ふと視線と気配を感じた。

俺の服とか変で目をつけられたのだろうか、すかさず自分の服装を確認するが何ら変わりなかった。

「君達、この都市に来るのは初めてかい？」

後ろから声を掛けられたので振り向くと、西洋被れのような長身の男性がそこにいた。

いつの間そこにいたんだろう。

「ええまあ、今日来たばかりなので道がわからなくて」

「それは大変だ！僕がこれから案内してあげるよ」

馴れ馴れしい態度とって俺の手を掴み、引つ張られていく。だが、その場で踏ん張りを効かせながら身体を引き止めた。何かあやしい、ジト目で男を睨むと目が泳ぎ始める。

「若い君達に、ななな何もしないから大丈夫さ」

「あーやーしいー……」

言葉が不安定で冷や汗も流れているようだ。

更にずっと睨みつけていると、観念したのかその男は俺の手を離して頭を下げた。

「ゆ、許してくれ！君が可愛かったので惹かれてしまったんだ！」

「へえ」

「……へ、へー」

こら、ヴェル。

変に漏れた言葉を真似して威嚇しなくていいから。

「可愛いつて言っておきながら行動は随分と大胆だったねえ。何か後ろめたいことあつたのかな？」

「えっと、それはその」

「もういいぞ、ダル。後は俺達がやる」

物陰や住宅の壁の向こう側から柄の悪い男達が数人、姿を現した。

そういうことか、ダルと呼ばれた男性を使つて俺達のような冒険者や観光客から金品盗る算段だったのか。

「随分と強気だねえ、お嬢ちゃん。だが、一度目を付けた俺達から逃れるとは思わないことだな」

「下らないことしてないで働いたら？」

「んだとテメエ?!」

その言葉で導火線がついたのか、数人の男は言葉を荒げ問答無用で襲い掛かってくる。

まあ正面で考えなしに向かってくるのは知ってたから風魔法で吹き飛ばしてやろう。

「ほーら、吹き飛ばー」

「うわああああ!!!」

両手で指示をして足元から、浮かしてそのまま空の星として飾りをつけたとき。

隣で男性が子供のように怯えていたので次はこうだぞ、と見せつける様に空をに指を差すと一目散に逃げていった。

「はあ……全く」

「ノルン様、たまにえげつないですね」

「水魔法で窒息させようと思えば出来るんだけど」

「思考も容赦ないですね」

冷や汗を流して小さくツツコミを入れられつつ、止まっている足を進めて再び目的の

学校へ目指した。

騎士養成学校の裏 前



仄暗く冷たい壁に背を預けてため息をつく。

あれから人に捕まった日から同じように尋問を繰り返されてはこの光の見えない牢屋に送り込まれる。

これでもう何日目なのだろうか。

横の壁に掘られた傷を数えた。

「これで5日目か……」

森林内で食糧調達の用で狩りに出ている最中、山賊と言われる卑劣な人間に捕まりそのままこの街での人質となっている。

目的は大体わかっている。

私を含めたエルフ達の制圧と支配、そして領土の拡大に向ける為の政治利用にするつ

もりだ。

「けっ、誰が教えてやるかっての」

この言葉を吐くのも、人質に取られてから何回言ってるのだろうかわからなかった。だが、静寂な牢屋と先の見えない闇の通路ではその言葉が静かに響くだけだった。ため息をつき膝を抱える。

目の前に広がる暗闇とそれに沿うような明かりの蝋燭を眺めていたら眠気が襲い掛かってきた。

最近、この牢屋に入ってから体に傷負ったり寝ることしかやることない。そう思ったら不安が少しずつ募ってきた。

「いつまで、これが続くんだろうな」

弱音を吐いても誰も聞いてないことに虚しさを感じつつ、心のどこかで助けが来ると信じながら今日も就寝することにした。

*

騎士養成学校は通称のようで、正式は王国騎士学校。

その学び舎で騎士としての掟を教育し、戦争に向けての育成もすることから養成もついでている。

冒険者ギルドの案内所にいるガイドがら聞いてきた話だ。

あの後、俺とヴェルはかなり探し回ったのだが、自力では見つけることは出来なかった。なのでラズリー内にある冒険者ギルドを探して入室し、ガイドに聞いて話を貰った。

ちなみに、何故その学校のことまで詳しいかと問うと、その生徒内には冒険者を兼業している人もいるのでそこから知識を得たりしたのだとか。

つまり、ここにいるギルドは、情報を得るにはもってこいの場所なのだ。

そして今の俺達は、ギルド内の食堂にあるテーブル席で座りつつその生徒を目で探していた。

受付を済ませながら手続きをしている人々を飽きせず見ていると、1人の黒髪ショー

トの男性が窓口へ向かうのを見かけた。

「あの人がそうなのかな？」

「ノルン様、私が見てきます」

席を立ち追いかける様にヴェルが向かっていく。

大きめのロープの影が少しずつ小さくなって、それと同位置の男性の隣についた。

数分何かを話している様子を見てみると、ヴェルが戻ってきて元の席に腰を下ろす。

「ここに出るパンケーキはとても美味しいって話ですよ！」

「食堂のおすすめを聞きに行っただけ?!」

食べ物の話じゃなくて、学校の生徒かどうかの話が欲しかったんだけど。

ヴェルがまだ幼く小さい部類だから子供と勘違いされたのかもしれない。

頭を抱えてため息をつき、仕方ないので食堂のカウンターに向かつてメニュー表からパンケーキを2つ頼んだ。

しばらくして、おいしそうな3段のパンケーキが俺とヴェルのテーブル席に運ばれて

くる。

丸型で綺麗に形取っており、上からかけられているメープルが彩度を明確にしている。

「確かに、美味しそう」

きゆるる。

俺のお腹から虚しそうに鳴ってしまった。

ヴェルにも食べたかったのですね、と笑顔で言ってきて余計に恥ずかしさが出てしまったので銀製のフォークで刺して一口食べた。

うん、メープルの甘さが生地に染み込んでしっとりとしていいね。

「食堂のスイーツの部類で人気の品物なんですよ」

食べてる途中に隣から男性の声があったので、振り返るとさつき目のつけた黒髪の男性がこつち来ていた。

さわやかそうな見た目の顔で腰元に片手剣と呼ばれる武器が鞘に仕舞われている。

「っ!?ゲホッ!ゲホッ!」

「大丈夫ですか?!」

まさかそつちから来るとは思わなかったのでむせてしまった。

男性に背中を擦られて息を整える。

「助かった、ありがとう」

「どういたしまして、お仲間さんでしたのね」

「ヴェ……レブラのこと? そうだね、見習い魔法使いの子で修行中なんだって」

感心してヴェルの方へ視線を移すと、パンケーキをゆっくり食べて幸せそうにしているのが見えた。

男性は少しだけ笑って、再び視線を俺の方へ向ける。

「ところで、何かご用でしょうか?」

「そうだった。貴方は騎士養成学校の生徒さんなの?」

その問いに男性は頷く。

生徒であるか確認するための物を要求すると、腰元の鞆の紐にそれらしきマークが記入されているのを見せ、これが学校に通っている生徒としての証と告げられる。

「その学校に何か用事とか？」

「用事ある訳じゃないんだけど」

そそくさと立ち上がり、男性の耳元まで口を寄せ何かその学校に黒い噂が無いかを聞いた。

だが、ハズレのようで男性は首を横に振る。

何か情報を得られないか機会あったけど、ダメか。

気分が少し下がり、元の席に座る。

「引き留めてごめんね、用事はそれだけだから」

「……黒い噂とかはないんですけど、理事長の執務室から何か悲鳴が上がったっていう話なら生徒間で聞いたことがあります」

今、重要な言葉を口にした気がする。

その情報に思わず立ち上がった、そして男性の手を握る。

少し照れくさそうにしていたようだったが、気にせずにお礼する。

更に、続きが聞きたくその話に食いつくように顔を近づけた。

「その悲鳴が女性だったとか何かなかった？あと、奴隷とかエルフとかいう単語とか
なかった？」

「い、いやそこまではわからなくて聞いた本人に確かめてみないといけないというか」
なんか、男性が少し赤らめてそっぽ向いてるけどどうしてだろう。

何やらヴェルがジト目で見てくるのを感じ取ったので気持ちを落ち着かせ一歩引い
た。

どうやらその話を聞いた人がいるということなので改めて学校の位置と道順を尋ね
た。

しかし、関係者以外の立ち入りは理事長の許可を得ないとダメらしい。

それをしちゃうと、一度顔合わせてる上に吹っ飛ばしたこともあるから一発でアウト

になるのは間違いない。

「それ以外に何かない？」

「学校の生徒の知り合いまたは冒険者パーティの一人とかなら許可なくとも入れることができま」

「それにしよう!!」

いい案を思いついてくれた男性に称賛したい。

だがその前にこの人を仲間に引き入れて学校でその人を探そう。

そう考えたらずぐ行動、早速案内所のガイドから窓口への手続きを行い仲間として加入するのだった。

そういや、名前聞いてなかったけどあとで聞いてみるか。

◇

ノルン様が食い気味でお相手の男の人と話してるのを見て、何か嫌な気持ちになった。

顔にも出ていたらしく、ノルン様がチラ見で私の顔を見ると一歩下がって態度を改めた。

残ってるパンケーキのかけらを口に運んで食べ終わると、即行動に移ったノルン様の後ろ姿を見ることとなった。

何やらこの呆然と行方を見届けているこの人と仲間になるみたい。

「ノルン様は偉大なお方ですから、仲間に入ったということを誇りに思っていますよ」

男の人は、私に話しかけられてから我に返り先ほどまで座っていたノルン様の向かい側に座って待つことにした。

「ええと、君がさっきの女性の仲間だったのかい？」

「ノルン様です！名前を覚えて下さいっ」

すつごい恥知らずだったので注意した。

「その、ノルン様？の仲間が君なのね」

「はいっ、さつきはパンケーキ教えてくださってありがとうございます」

「お礼なんて大丈夫だよ、それであの人が学校に行きたい理由ってのを知ってる？」

話してもいいかわからなくなって言葉に詰まってしまった。

どうしよ、伝えていいのかわからないしノルン様がいないと私がリカンの奴隷ってことも説明できない。

ええと、ええと……視線があちこちにいたり焦っていると男の人は諦めたようにため息をついて苦笑いした。

「大丈夫、これから仲間になるんだから話してもいいよ。それにさつきの話のこと、本人にも聞いてみたいこと僕もあるから」

「……」

途中で真面目で声質を少し落とし低い声で私に言ってくる。

目つきも先ほどまで真面目になっていたらしい。

……話しても、いいよね？

「わかり、ました。ですけど、ノルン様が来てから説明してもいいですか？」

「いいよ。3人でその話をしよう」

男の人は私の条件に快く受け入れ、窓口の方で時間かかっているノルン様を2人で待つことにしたのだった。

騎士養成学校の裏 中

*

「理事長を……こらしめる？」

銀髪の見習い魔導士のレブラ・ミストセレーが偽名で本名がヴェル・スカリールであること。

他にヴェルの事を簡単に説明して、目的にしている1番目にやりたいことを男性に伝えると、顔面蒼白にして少しだけ怖がりを見せている。

俺を含めた3人はギルドからの申請が通り、ギルドから出てパーティーとして街中を散策していた。

その途中で洋風な喫茶店に入店してから話をした。

ヴェルからこの人が気になるから話して欲しいと頼まれたと言われた時は、少し戸惑った。

通っている学校のお偉いさんを殴りに行くって言われていい気はしないだろう。

だからこの人とパーティー組んでギリギリまで協力して貰ってあとは解散する予定ではあったのだが。

「あのリカンっていう奴は裏で人身売買をしてるから、その証拠を掴んでヴェルを解放させるようにする。それが私の本来のここに来た理由なの」

「そ、そうなんですか。ということは、僕はその学校の通行証代わりという……?」

そういうことになる。

肯定的に呟くと、男性は項垂れてしまった。

「まあ理事長に喧嘩売りにいくようなものだって考えれば楽なんだろうけど」

「た、確かに」

「でも、ヴェルを乱暴に扱ってき、それを見て他の女の子も乱雑に扱ってると思うと……すぐくム力つくんだ」

乱暴に扱っていいものじゃないし、可愛くあるべき。

と、前世についての女性誌をチラ見していた経験を元に話すと隣でヴェルが感動して

尊敬の眼差しを向けていた。

「……わかりました。僕も改めて協力させてください」

「ありがとう、仲間は多い方が少しでも助かるから」

肯定した男性から右手を差し出されたので左手で握手して改めて迎え入れる運びとなった。

「ちなみに、名前聞いてもいい？ギルドの方で君のような人での名前が見当たらなくてさ」

「名前ですか？僕はレスト・フェルディアスと言います」

レストでいいですよ。

そういつて男性は笑みを浮かべた。

爽やかな男性が笑みを出すと眩しく見えるというのは本当のことなのか。

ちよつとだけ僻みつつ、喫茶店での会計を済まして本来の目的地へと向かった

道順をレストに聞きながら暫く経った後、着いた先は模様が豪華な鉄柵を取り付けられている大きな学校だ。

大きさはどれくらいだろうか、空を飛ばうと浮かび上がるとレストが制止してくる。疑問に思ったので、近くの小石を柵超える勢いで上空に飛ばした。

飛んだ瞬間小石は火花を散らせ粉々に砕かれてしまった。

「対侵入者撃退の結界がこの学校に張り巡らされていて、校門を必ずくぐらないといけないようになってるんです」

警備は嚴重のようだ。

その昔、学校を上空から飛んで登校してきた人が増えたので校門からの入場じゃないと生徒として認めないという掟が出て以降から厳しくなりつつあるとのこと。

俺達は校門から入り、煉瓦で敷き詰められた道を進みながら入口に到着して、重そうな扉を開く。

扉を開けてすぐのエントランス、左右に伸びる道と目の前にある案内所がある。

レストはすぐさまそこで気怠そうにしている人に話しかけた。

俺とヴェルもそれに続く。

「はーい？あ、レストさんですか」

「レスト・フェルディアス、冒険者ギルドから戻ってきました。後ろにいるのはそこで知り合ったパーティです」

案内さんがこちらを覗くように顔出してきたので一礼をするとため息をついてレストと同じの校章が記されたゲストカードを手に入れた。

通行証のような当日限りの物らしい。

「王国騎士学校は初めて？」

「はい、初めてです」

「じゃあ、案内するわね」

そう言つて、俺と同じくらいの暗い茶色く長い髪を少し揺らしながら学校内のマップを説明してもらつた。

教室は今いる場所から2階ぐらいからで1階は教師達が主に働いている一室が多い。

理事長室が1階の廊下奥側でその隣が執務室だそうだ。

校内の地図とにらめっこしてる最中、レストが案内さんと話し始めた。

「ところで、生徒の皆は？」

「今の時間は実技特訓ですよ。レストさんはこれからですか？」

「いえ、生徒内での噂について聞きに戻ったんですけど」

「……あー、理事長室の隣の執務室での悲鳴の話ですか」

暫くその噂で持ち切りだとうんざりしたような低い声で息をするように返してきた。そしてお前もかと振り払うような少しだけ冷たい声で門前払いをされかける。

「そこをなんとか！甘味好きの案内所さん！今度奢ってあげますから！」

「はあ……わかりましたよ」

年下に集る感覚で嫌気さしてるけど、奢ってもらえるならそれでいいらしい。

いいのか、それ。

レストの頼み込みでなんとかその噂の内容を詳しく聞くことが出来た。

内容というのはイマドキ女子が勝手に思い込んで勝手にでっ上げた噂のようなも

のだった。

執務室から女性の悲鳴が上がったあの中で理事長が女性と逢瀬を遂げて云々。

その悲鳴もよくよく考えたら黄色い方への声に近いとか色々。

事件の匂いというものがよく感じ取れなかった。

「聞き損かねえ」

「振り出しになつてしまいましたね」

「ただの噂ですし、その程度かと」

噂だけど一応は確かめてみようという結論でレストを先頭に執務室へと歩き始めた。

エントランスの右側の奥がそうらしいので、そこへ向かいながら噂話を非難した。

ちなみに、この用事終わつてすぐに案内さんとレストは甘味探しへと外で食へに行くとか。

モテそうな行動取つて羨ましいですこと。

僻みを心の中に入れてつも、室前まで来た俺達はその中へ入る。

今は理事長が出張で留守にしているらしいので調べられるのなら今の内と案内さんからのお墨付きだ。

来客用のふかふかなソファがあり、その奥側に作業用の机と羽ペンが添えられている。

そして、全身の見える鏡と本棚、校章の入ったテナントが飾られてあるくらいで他は特にこれといったものは無さそうだ。

「怪しいものは無さそうだね」

「ノルン様つ、このソファーふかふかしますね！」

「遊びに来たわけじゃないんだから」

「悲鳴の大元はここらしいので、もしかすると何処か隠してるのかもしれないね」

レストからの案で、更にくまなく探すことにする。

床やソファの下、絨毯をめくつてもそれらしき痕跡や上げる元となつた証拠が見当たらない。

参つたな。ここで手詰まりとなると学校内風漬しで調べるしかないぞ？

そう思い、本棚と鏡の間に背を預け2人が探している様子を見ながら考えていた。

そしたら、世界が反転した。

◆
遠くから急激な物音と何かが転げ落ちる衝撃で目が覚めた。

「なんだ!？」

飛び起きて鉄檻近くまで顔を寄せ、目の前の廊下の様子を見た。

そして、遠くから女性のような声が聞こえてきた。

「どうやら誰かがここに来たらしい。」

とはいっても、どうせアイツの仲間だろう、私はその正体を見るまで身構えていた。

そして少しずつ近づいてくる軽い足音と声。

蠟燭の光が私の目の前で正体を教えてくれた。

「……………あ?」

「あれ？なんでここにエルフ？」

腑抜けてそうな女性が私の姿を見て、すぐに種族を言い当てて首を傾げていた。こいつ、アイツの仲間にしたか？

そう考えていると、青い瞳をこちらに向けて疑問が飛んできた。

「それより、何ここ。すごい不気味な部屋なんだけど」

「牢獄だよ、人間。そんなこともわかってねーのか？」

「口悪っ、誰から教わったのさ、その言葉」

知るか。

勝手に覚えちゃったもんはしゃあねえだろ。

「それと、学校の地下に牢獄あったなんてびっくりなんだけど」

「……は？学校だと？」

その単語でこの前の出来事がフラッシュバックした。

そして今の自分の立場を嫌というほど押し寄せる様に知らされて項垂れた。

「どうしたの？」

「別にいいだろ」

「良くないでしょ。怪我もしてるし……あれ？」

言葉が変に途切れたので、その相手を見た。

そして次に出る言葉から、私はこいつが味方であることが確信出来ると心が躍った。

「アナ・ツアイヴちゃん？」

「……………」

微かに、ほんの微かに感じる父親の気配とその相手から出ている魔力を感じて思った。

本当に味方なのだろうか、だけど相手が人間だからわからないがヤケだ。

「アナちゃん、だよね」

「助けてくれ！私はここから出たいんだ！」

食い気味に助けを乞う私を見て、相手は目を見開いて驚いていた。

騎士養成学校の裏 後

*

鉄柵に必死に掴んで助けを求めているエルフを牢屋から出す策を練る。

助けてくれと言われて勢いで頷いたのはいいものの、俺の魔法で鉄を裂けるくらいの力があればいいのだが。

一応を手を前にして風魔法を生み出し、それを圧縮させるように手中に収める。

「今からこの柵を吹き飛ばすから、ちよつと離れてて」

「ああ、わかった」

忠告を受けたエルフはそそくさに柵から離れる。

その後すぐに圧縮した風魔法を両手で二つに分けて、真横に切るように手刀で一閃した。

鉄柵はその風の刃に成す術なしに真つ二つに折れ、目の前で騒音を掻き鳴らしながら

崩れ落ちていった。

魔法で折った場所から一人すり抜けられるぐらいの隙間が出来る。

「これで通れる？」

「ああ、助かったぜ」

アナはその間からすり抜けるように脱出する。

その後、エルフの身体全体の怪我が割と酷かったので、水魔法でデナが使っていた回復魔法を思い出すように使いながら手当をする。

蚯蚓腫れや切り傷、擦り傷などがすべて消え、肌も生氣に満ち溢れていた。

「これでよし、と」

「詠唱無しで魔法も使えるとか、大魔法使いかよ」

一応、大魔法使いであると説明はする。

アナはジト目で怪しむように聞いていたようだ。

とりあえず、魔道具も何一つ持つてないことを証明するように両手を上げて確認して

もらった。

確認後に納得いってもらえたのか、エルフの口から安堵の息が零れていた。

「そういや、なんで私の名を知ってるんだ？」

「アナちゃんの父親に会ってき、探すという約束ついでに教えて貰ったんだ」

「そうだったのか。じゃあお前はアイツ等の仲間じゃねえんだな」

「アイツ等？」

リカンの事だろうか。

しかし、彼女は複数呼びであいつ等と言った。

リカン以外にも他の人がいるってことなのだろうか？

「ああ。大男の他に数人グルでエルフ族の村を襲った連中がいる。そいつらもアイツの元で雇われた傭兵とかなんとからしいぞ」

「エルフの村を襲ったの？」

アナは頷いた。

そして、リカンの本当の目的を苛立ちを抑えながらも語ってくれた。

「そうだ。アイツ等は領地の拡大を狙って私達の村を明け渡せと言ってきてな、父がそれを断つたら私を人質に取り力で捻じ伏せて成立するまで奴隷にする予定だったんだ」

「ラズリーの領地の拡大……」

「私のところじゃねえ、他でもその拡大のためにどんな手段を用いてもいい連中のようだぞ。湖で暮らしてた精霊が悲鳴上げてたくらいにだ」

デナは大都市の名前を口にした途端にあんなに憤りを感じてたのか。

リカンの目的は人身売買で奴隷を買って楽しむ変態の他に黒い手段で領地を広げようとしている。

じゃあ、身寄りのない人間を奴隷として買ってる半分の目的ってまさか。

「他国を脅迫する為の道具？」

考えすぎかもしれない。

だが、これならヴェルが買われて仲間が憲兵に殺されてトーガさんが言っていたこれで救われるという遺言の辻褄が合った。

なら、尚のことエルフを助けて逃がさないといけない。

「アナちゃん、上の階に私の仲間がいるからその子達と一緒に逃げよう」

「助けてくれた礼もあるし、お前は信用できそうだからその言葉に乗るよ」

「お前、じゃなくてノルン。私の名前」

「つと、ノルン。逃げる案には賛成だが、その前に助けて欲しいのがいる」

どういふことだろうか？

疑問を投げかけかけようとした時にその答えは視野に飛び込んだソレを見てすぐに答えが出た。

アナが入っていた牢の右側に不自然に積まれた煉瓦の壁、それに思いつきり突進をして崩した先に道が続いている。

そして、その先の景色には幾つもの鉄柵が並んでおり、悲鳴と助けを求める声が急に聞こえてきた。



「ノルン様——！何処にいますか——！」

「ノルンさん——！いたら返事をお願いします——！」

さつきまで同じ執務室にいたはずのノルン様がいなくなっていた。

嫌な胸騒ぎと不安が同時に襲い掛かって来て、レストと共に探した。

この部屋内で一緒にいて気配もなく居なくなったので、何処かへ出て行ったのかもしれない。

「他の部屋に行ったかもしれない。探してみよう」

「そうですね。他の部屋で手がかり探してるのかもしれない」

レストがこの部屋にいないと確認し終わった後に執務室の扉に手をかけて次の案を

言ってきた時だった。

その扉が勝手に開いて、見覚えのある姿と鎧が視界に入り込んできた。

「学校内で不審な行動を取っていると案内から聞いたものだが……？」

「憲兵？ 何故ここに？」

「……あ」

立ち竦んでその場で動けなくなり全身に悪寒が過る。

あの鎧と見た事のある武器。

冷酷で感情があまりない言葉。

あの時のあの子が死んでしまった前にいたあの憲兵がそこにいた。

「……ヴェルさん？」

「い、いや……なんでここに」

「ヴェル？……ああ、あの理事長のお気に入りか。そして、主人に逆らって逃げた犯罪者」

ニタリと悪事を抱えた笑顔で睨みつけてきた。

脳内で逃げろと殴りつけてくるように警告してくる。

だけど、足が震えて動けなくなってへたり込んだ。

「この生徒さんでいいんだっけ？ちよつとどいてくれないですかねえ。あそこにいる犯罪者を捕まえるのが我ら憲兵の仕事なんでね」

「ちよつと待つてください。理事長からの許可は得ているんですか」

「そりやもう、顔パスよ」

心臓の鼓動がうるさいくらいに早く鳴り出して身体が早く逃げろと信号を送られている。

声も出ず、過呼吸になり始めたけどレストが口論してる間に背を向いて逃げようとした。

「おかしい。貴方達のような憲兵は見た事ないんですが」

「はあ？」

レストの言葉が扇動的になったのか、手に持っていた三叉の槍の刃先をレストの首元に突き付けた。

「アイツを庇うってならお前も犯罪者として捕まえるぞ」
「僕は事実を言ったままですよ」

このままだと、レストが殺されてしまう。
でも、私も逃げないと助けてくれたノルン様ともう一緒にいられなくなってしまふ。
——ノルン様なら、なんて言うんだろうな。

「……わ、私が目的なんでしょ!! だったら早く連れて行ってよ!」

憲兵がゆつくりとこちらを振り向いて、また悪そうな笑みを浮かべた。
そうだ、ノルン様は逃げずに立ち向かった。

恐怖と震えが尋常じゃなく鼓動も酷くあるけど、それでも目の前でもう人を死ぬのを見たくないならきつとこうするはず。

「いい子だねえ犯罪者。なら、これから牢へ連れていくことにするぞ」

槍が下がり、そのまま大股で私の前まで近づき、手を取った。

多分、私はあの男の前で処刑されるのは目に見えている。

短い間だけど、ノルン様と一緒にいれて楽しかった。

「レストさん。ノルン様に伝えておいてください。今までありがとうございます、と」

最後の表情は笑顔でいよう、涙を流してレストにそう伝え引つ張られるようについていく。

そして憲兵が扉のドアノブに手をかけた瞬間だった。

「穿て！風の刃！」

後ろから吹き荒れる突風、その突風は両側にいた憲兵を扉に叩きつけた。

予想外の事で驚いた。

吹いた先を振り向くと、レストが片手剣を引き抜いて攻撃した後だった。

「やれやれ、本当は潜入中に問題を起こしたくはなかったんですが」

「え？あ、あの」

「お、お前！公務妨害だぞ！国を敵に回したぞ！」

立ち上がり、槍を構えて戦闘態勢に取った憲兵達が叫んだ。

呆然と見ていると、レストがこつちに来るようにと指示をしていたのですかさず従った。

途中、憲兵の手が捕まえようとしていたけどその手は少し開いている扉の隙間から出た女性の手で捕まった。

「正体を出さない約束だったんじゃないの？面倒事はごめんよ？」

「すまない、サリ。仲間を見捨てる訳にもいかなかったの」

そして堂々とその姿を現したサリと呼ばれた女性の顔をよく見る。

あの時の案内所にいたガイドの人だった。

「貴様等、国の反逆罪としてここに居る全員犯罪者と見なす！」

「それは貴方達ですよ、偽物の憲兵」

「そうね。雇われの傭兵がこの紋章を持った武器を持っているはずがないから」

サリは憤慨している二人の憲兵に鋭利で切れ味抜群であろう短剣を見せた。

その柄の部分に刻まれているのはラズリーの国の紋章。

憤慨していた二人はやがて恐怖に満ちた声を絞るように出した。

「……ま、まさか、王女護衛率いる本物の精鋭部隊!？」

「護衛隊の他にも憲兵達を纏めて率いているあの人がすべての司令よ」

「レスト・エメル・フェルデイリア。フィア王女様を守り、この都市の秩序を統べる司令塔。それが僕です」

偽の憲兵から、兜の隙間から空気の漏れたような怯えた悲鳴が上がっていた。

そして、この後すぐに部屋の奥側から人が現れたのはサリが偽物を捉えて部屋から出た後の事だった。

*

「これで10人目、と」

牢屋の鉄柵を魔法で次々と壊し、アナと捕虜となつている人達を助けに回りながら蠟の火だけが頼りの坑道を進む。

学校の下では長く広い牢屋と道があるとは思わなかった。

一体どこまで続いているのだろう、それにこの先に出口はあるのか？

アナが言うには、ここは何処か別の道と繋がっているようで、俺達が突き破った壁がある学校の地下は、そこから緊急用の出口としての経路の為と牢屋内で小耳に挟んだらしい。

「それで、この先って何処に繋がってるんだらう？」

「さあな」

アナが肩を竦める。

その光景を尻目に、周りを見渡す。

薄暗く見えづらいが、助ける人もこれで全部のようだ。

さて、後ろに集団となっている助けた人達をどうするか。

「とりあえず、来た道に戻って上にいる私の仲間と合流してから脱出しよう」

解決策を皆に伝え、踵を返して突き破った壁の元へ戻る。

そこから、足を滑らせて落ちるように降りてきた階段の元まで案内した。

アナを先頭で俺が一番後ろになり、その間に助けた人達を挟みながら階段を上がる。

塞がっている出口の隙間から光が漏れ始めているのを見かけると、皆にそこが出口と伝えた。

「回転式の扉っぽいから、下からくぐるように出れるよ」

最後尾にいたので、少し大きめに伝令するとアナが着き、先に扉の下側を押し込んで開ける。

2番目の子から順に外へ出し俺の前の子まで外に出ることが出来た。

後はアナだけ、そう言おうとした時。

地下から、大きな足音を立てながら上がってくる音が聞こえてきた。

この場所を知って、この階段を余裕で上がってくる人物は一人しかいない。

そして、その正体は俺の視界でまっすぐに捉えることが出来た。

怒りに満ちた顔で見上げて睨みつけ、今にも食いついてきそうな態勢を取っている大

男。

「リカン・フェイアス……い！」

大魔法使いとしての戦い

背後からアナが呼びかけてきたが、後から行くと伝え、先に行かせる。

後ろで扉の回る音が静かになったのを耳で確認した後、間合いを詰められないように回転扉の前まで後ずさる。

鬼気迫る表情を向けられてるのを睨み返すが、足が少しだけすくんでいるのがわかった。

自宅で鳩尾に柄を落とされて飛ばされた痛みが身体で記憶しているのか、はたまた性別的な本能なのかはわからないが、相手に悟られないように顔を崩さず見る。

「貴様、あの時の小娘か。下の惨状は貴様の仕業だな？」

重く低い声が少し離れていてもよく耳に届く。

薄暗く少しだけの密閉空間の階段で洞窟のような形を取っているから少しだけ離れていても響いている。

「そうだと云ったら？」

声のトーンを少し落とし低めに返すとリカンは眉を引くつかせ更に怒りの表情を顔に映し出し始める。

とはいえすぐに襲い掛かってこないのは、俺が以前に風魔法で吹き飛ばした事で学んで警戒をしているのだろうか。

だが、相手も触発寸前。

ここはやられる前にやった方がいい、悟られないように背中で水魔法を手の上に作り、魔法弾を精製する。

「逃がした連中から話は聞いたのだろう。ならば、ここで生かして帰すはずもない」

武器もないのにどう戦うのかと疑問を投げかけようとした時、その答えはすぐに出た。

リカンが右手で壁に手を押し当て何かを唱えると、その壁からいきなり長剣を創り出した。

前に見かけた銀色の長剣と同じ大きさの土色の剣で、硬度はかなりありそう。

「壁から剣……魔法？」

「察しがいいな小娘。魔法道具の腕輪を使い、地魔法で作り上げた長剣だ。これは接近戦と魔法戦を踏まえた武器となる」

よく見ると、リカンの右腕に銀製の腕輪が装備されていて、そこから鈍く茶色に光る物を見つけた。

「これは相手が遠距離戦でも大丈夫なように作り込まれていてな。このように！」

分析しているのも束の間、リカンがその剣を地面に乱暴に叩きつけ、煉瓦や片手に収まりそうな石がこちらで目掛けて矛となって飛び掛かってくる。

俺はすかさず後ろで作った水魔法で全弾撃ち落とし、隙を与えずに反撃へ乗り出す。風魔法を使い、下側から突進で襲い掛かってくるリカンの勢いを殺すように風圧の盾を作る。

リカンはその盾を割る勢いで手にしている剣を振り下ろして衝突させた。

「勢いが強い……！」

「遠近どちらでも戦えるように生み出した魔法だ」

「くっ！」

盾に亀裂が入り込んだのを視界で捉え、盾ごと真上に突き飛ばした。

一瞬浮かび上がった大男の身体は宙を舞うが態勢を整え、綺麗に着地する。

その隙を見逃さず、俺は水魔法で再び散弾銃のような魔法弾で牽制するように撃ち始める。

剣で前をガードしつつ押されているのが見え、ようやく間合いがさっきの距離と同じになる。

「どうした？魔道具を付けてその程度なのか？」

「……今度はこっちの番！」

無傷を主張する相手に今度は両手を前にして魔力を少し多めに放出し、水魔法を精製して相手に向かって突き飛ばした。

スピードに乗った水弾はリカンの前まで到着するのにすぐだった。

再び守りに入ろうとする行動をする寸前、追い討ちをかけるように風魔法を水玉の背

後から撃ちだす。

突風を呼び、相手にカードする動作を鈍らせた。

結果、速さの乗った水玉が直撃しリカンを飛ばすことに出来た。

飛距離は少し小さめだけど、進歩である。

「風と水……ほう、魔道具2種類持ちとは中々考えたな」

「魔道具無しで出せるけど、ね！」

間髪入れず、次に水玉を風に乗せて銃弾より少し早めの弾を手から撃ちだす。

何発かはじき返しながらもちよつとはダメージを感じているのか、大男の表情に苦戦を強いられるような顔が見られた。

よし、このままなら勝てる！

「小賢しい真似を……するなあ！」

全ての水弾を斬り払い、大地の剣を地面に突き刺す。

そしてリカンがその剣の柄を両手に持ち替えた途端だった。

「大地よ！我に鼓動せよ！」

リカンの周りから地殻変動が起き、そこから衝撃波がこちらへ目掛けて走ってきたのだ。

飛ばうとして風魔法を身に纏わせ宙を舞うがその上が天井だった為、衝撃波の攻撃範囲内に留まってしまった。

「くううううっ！」

歯を食いしばりその衝撃波を身体ごと受けるが、持つことはなく身体が飛ばされる。出口側に思い切り鞭打ちを食らい、その場で倒れ込んだ。ダメージが遥かに強く、全身に力が入らずにいた。

「か……はあ……」

「ふんっ!!」

追い討ちが来るようにいつの間にか上がっていたリカンから蹴りを貰い、一気に立場が逆転し崩れた階段下まで投げ飛ばされる。

やがて身体から赤い液体が滲み始め、鉄の匂いが鼻をくすぐった。

足を奮い立たせるような気力が残らず、重く顔を上げながら悔蔑のような表情で見ているリカンを睨んだ。

「付け焼刃の魔法など、俺には届かぬ」

「ヴェルを……ヴェルを解放しろっ」

「藻屑は藻屑だ。解放などしてやらん」

心の奥底で願ったことを鼻で笑ったりリカンが出口の近くまで歩みを進めた。

身体に鈍痛が走り、目も霞み始める。

あのまま行かせてしまえばヴェルは今度こそ帰らぬ人になってしまう。

そんなのは、心から嫌だった。

小さなきつかけから過ごしたけど、久しぶりに一人以外の生活も悪くないなって思っていた。

「ただ、ここで終わらせたくない。」

少しの旅路で見せたあの笑顔を守りたいと、心に誓ったから。

「ま、だ」

「まだ、終わっちゃいない。」

重くなった両手を今踏み込める気力を使って相手に向ける。

残す一撃は少ないかもしれない。

少ないのならいっそ、魔力を全部使って一気に倒す。

そう、思いつきり一発でかいのを当てるように。

ここで頭に過った詠唱と魔法が言葉に出る。

「水の精霊よ、風の精霊よ。荒れ狂う業をすべてその力を矛へと化せ！その矛は、空を裂く一撃！」

『テンペスト・レイン
怒り暴れる嵐の雨!!!』

大声で叫んだその魔法名を放った途端、前方が厚い風で全てを遮った。

暴風とも言えるその轟音は殴りつける雨と共に周りの壁を掘削しながらも出口へ求めて前進する。

そして雨で掘削した煉瓦が崩れ刃となつて肥大したまま、扉に手をかけたりカンへ目掛け進軍して飲み込んだ。

俺の持つ最大の魔力の膨大さに、その暴風と殴りつけるような雨は扉ごと破壊して執務室が丸見えとなり、リカンをその先の壁へめり込むように叩きつけた。

その一連を目にして、俺はそこで意識が途切れた。



下で囚われていたと言っている捕虜達の話を読んだことが聞いている時、凄まじい轟音がこの執務室内に鳴り響いた。

その元へ視線を向けると、私では見たことのない風の魔法が見知った顔の人間を殴りつけ壁に激突させていた。

レストもその光景に驚きを隠せず、捕虜の安全を私に任せて突然現れた洞穴の方へ確認していく。

奥へ続く通路の中を遠見でしていたら、レストが何かを発見した。

私もそれに続いて、通路の奥を見ていく。

そこには、白く細い手が地面に倒れ込んでいた。

まさか。

そんなまさか。

「ノルン様!!!」

「あ、待ってくださいー!」

レストの制止に耳を貸さず、崩れて割れている階段を降りて正体を確認する。

満身創痍でぐったりとうつつ伏せて倒れているノルン様がそこにいた。

腹部から赤い血が少し溢れていて鉄の匂いが鼻を揺るがす。

「ノルン様! ノルン様! しっかりしてください!!」

身体を揺さぶり、生死の確認をする。

ノルン様がここで死んじやいけない、私は恩返しも何もしていないのに。と、ここで瞼に反応が出てゆっくりと目を開けてくれた。良かった、生きている。

「ヴェ…………ル？」

「ノルン様……………」

力なくか細い声で呼びかけてくれたので涙が溢れ、応じた。

すごく痛々しい恰好でいますぐにでも手当をしてあげたいくらいだった。膝の上にノルン様の頭を乗せて、後続で来るレスト達を待った。

「ヴェル、リカンに勝った」

「はいっ……………」

「多分、これで解放されるよ」

「……………はいっ。私はその目的よりもノルン様が生きていて本当に良かったです」

本当に、良かった。

涙がノルン様の頬に落ちると、ノルン様は申し訳なさそうに顔を変え私の頬に手を添えてくれた。

その手を私はしっかり握りしめる。

「ごめんね。一人にさせちゃって」

「大丈夫です。もう大丈夫ですよ」

……そっか。

小さく呟いたノルン様は目を閉じ動かなくなつた。

添えた手も次第に重くなり始める。

だけど、その手はまだ温かくて心地よかつた。

「間に合いました。彼女は気絶していますよ」

後方からやれやれと言わんばかりに追い付いてきたレストが安否を告げる。

魔力切れによるもので身体が休みを欲している期間だそうだ。

道中の旅で突然倒れたノルン様はその状態のことだったのかな？

「とはいえ、身体の傷と血が出ていて危険な状態なのは変わりありません。このまま僕が務める駐屯地で応急処置しましょう。今、手配を呼びます」

レストはてきばきと仕事をこなして、最後にノルン様を背負った。
本当なら私がしたかったんだけど、仕方なかった。

「ノルン様、あと少しですからね」

崩れそうな階段を上がり、執務室でノルン様をソファーに仰向けに寝かせて緊急手当をする。

血が出ているところに包帯を巻いて止血をする。

回復魔法が出来る人がいいのだけど、今ここにいる人達の中ではいなかった。

ここで、私が使えたらよかったのに。

少しだけ悔しい思いをした。

「後は……」

レストが手当を終え、壁に項垂れているリカンに歩み洞穴に指を差しして言及し始めた。

「これはどういうことか、あとで王族護衛の下で話させて頂きます」

「……く、エメル王族部隊か。いつの間に」

「この学校で奇妙なものを見た聞いたという話が沢山あったので、潜入しました。そしてあの先にある物。洗いざらい吐いてもらいますよ」

目を細めて殺意が見えるくらいに表に出たのを感じ取ったりリカンは両手を上げ、降参した。

これで私も解放されて終わる。

奴隷という肩書が終わって、普通の人間に戻れる。

そう思うと嬉しさに涙が出てきた。

これも全部、皆ノルン様のおかげ。

少しだけ安心して眠っているノルン様の頬を撫でながら、改めて心の中でお礼を言っ

た。

私を救ってくれて、ありがとうございます。ノルン様。

三つ目の特典とこれから

机に伏せて寝ていたのか、目を覚まし顔上げると見知ったパソコンから検索サイトを映し出していた。

一日の半分を過ごすときに寝床にしている部屋は、柔軟性を少し落とした休めの白いベッドと正方形の黒い白いテーブル。

作業や本を身体を休ませながら読める机やその上に置いてあるデスクトップパソコンとキヤスター付きの椅子が俺の日常でなくてはならない存在の家具達だ。

実家暮らしとはいえ、自分で揃えられるものは揃える。

その手段で仕事しては買い続けてた結果がこれだ。

それにしても、随分と長い夢を見ていた気がする。

検索サイトでいつものように何かを調べようとした途中で俺自身が異世界で過ごす夢を見るといえるのは我ながら欲望丸出しとしか言いようがない。

「それが本当の事で、貴方の転生した先の世界がそうなんですけどね」

聞いたことあるような高く落ち着いた声を耳にしてその元へ振り向く。

ベッドの上で不機嫌そうにこちらを見つめ頬を膨らませている女性がいた。

その部屋に似つかわしくない姿と異端を見て、俺は再びパソコンの画面に視線を戻す。

いつの間にか電源の切れていた黒い画面から薄く見える少女の顔を見てようやくここが現実世界ではないということが実感できた。

「なんで死にかけてるんですか、バカなんですか？」

そして背後から子供じみた罵倒する言葉を貰いながら今までのことを思い出した。そうだ、あの時魔法を全魔力使って放ってそれから。

「魔力無くて満身創痍で肉体が大変な状況に陥ってるのが貴方の今ですよ」

「ああ、そうだ思い出した。神様か」

「なんで忘れてるんですかあ!!」

いよいよもって泣きそうになっている神様を宥めると、咳払いをして座り直し、態勢

を整えた。

「今、貴方は最初の頃とちよつと似た場所に魂が落ちたところで私がそこに介入して話している現状です」

「死んではないということか?」

「あちらの人間の世界で言う、三途の川というのがありますよね? その川を中心に渡ろうとしているのが貴方で私はそこから引つ張り上げて、戻したというのが正しいでしょうか」

簡単に言うなら生死を彷徨っている状態で、この俺の部屋はその戻した場所ということらしい。

神様は一通り説明を終えるとため息をついてジト目で睨んでくる。

「というか、せつかく送り届けて新たな道を歩ませたのに短い人生で終わらせるつもりなんですか。神への冒瀆ですよ」

「それは、まあ………面目ない」

普段なら地獄へでもすつ飛ばしてやりたいと恨みの入った言葉が刺さる。

俺からしたら16年、いや前の世界と含めて約41年は長い方だと思うのだが、幾千年を眺め続けていた神様にとってはほんの小さく短い年数だと思ってしまうだろう。

「反省があるならいいんです。次は繋ぎ止めることはないと思っけていてください」

釘を刺すように言われて言い返すことも出来ず、精進するとしか口にする事は出来なかった。

「そうだ、忘れるところでした。繋ぎ止めた理由はそれだけじゃないんです」

それから、神様は何かを気づいた顔をしてその理由を俺に伝えてきた。

まず、転生の特典についての内容。

お任せとして付けた後に言うのが義務となっていたのだが、それを言う前に転生させてしまい遅れてしまったので改めてその内容を知らされた。

一つは性別が変わった事。

これについては産まれてから7歳の時に実感出来た。

二つ目に魔法使いで魔力を無限に生み出し撃ち放題に出来た事。

新たな世界で大魔法使いなんていう大それた職とかは思わなかったのが意外な情報で、実力はそれを手に取るくらいにわかった。

「でも、何故あの時急に目覚めたように出せたんだ？」

「16歳で使えるというのは私の趣味……こほん！ 幼い頃ではまだ魔法を使う際に出る反動が大きかったり不安定であつた為ですよ」

今、聞き捨てならない単語が聴こえてきたような気もしたが、生殺与奪の権限があつちにあるから逆らわないようにした。

「そして、三つ目の特典があります」

「三つ目？」

「三つ目、それは——」

*

意識が覚醒し、重い瞼を少し開く。

視線の先には宿屋でよく見る天井とは違い、壁際に続く柱を目で追うと上にランタンが設置されていた。

外が暗くなっているのか、ランタンの光が強く輝いている。

身体をゆっくり起こし、辺りを確認しようとしたところで右手に何か柔らかい感触。端でベッドに頭を預けて静かに寝息を立てているヴェルがいた。

右手は、布団に投げ出されている少しだけ小さな両手にぶつかっていたようだ。とりあえず、寝ているヴェルの頭を優しくなでてあげる。

「……何処だろ」

しかし、宿とは言っても構造が違う。

床も木製ではなく、絨毯で暗めの色が敷かれていて目に優しい。木造の扉があり、その左隣には薬品棚のような物になっていた。

もしかすると、ここは医務室か何かだろうか？

高校生の頃に学校にあった保健室と似ている気がする。

「ふあ……ノルン様……ノルン様!？」

睡眠から解放されたのか、頭を撫でられることに気づいて、ようやく眠気から覚めたヴェルが顔を上げて私の事を見て驚愕してきた。

そしてあたふたと身体を往生させた後、レストさんに伝えてくると風のように部屋から出て行った。

あんな行動力を隠し持っていたなんて、ヴェルも成長したものだな。

感心をしていると、腹部から痺れるような痛みが全身に走る。

「いった……あー、そうだ」

確か、俺はリカンの戦闘で辛勝して満身創痍で意識が飛んでいったんだっけ。

詳しくは魔力を魔法に全部乗せ放ち、その衝動で身体に影響出て傷の痛みとそれで気絶した。

さつきまでの出来事を思い出すように回想していると、扉からノック音が3回聞こえ

てきた。

それに答え、扉を開いた先に来る知り合いを迎え入れた。

「やっと目が覚めたんですね、よかったです」

爽快な顔をして笑顔を出すレストが安堵の息を漏らして近くにある椅子に座った。その後ろから戻ってきたであろうヴェルも来る。

「あの日から10日眠ったままだったのでもう起きないのかと思っていました。回復専門の魔法使いを呼んでも癒えたのが傷くらいで意識までは帰ってこなかったの」

「10日も眠ってたのか……」

長いようで短く感じた期間があまりにも長すぎたらしい。

レストも少し不安な表情を出して心配してくれていた。

眠ってる間、肉体と精神が離れないように変な場所で神様と話していたのは本当に正解だったのかもしれない。

レストは体勢を立て直し、リカンのあの後についてのことを語ってくれた。

あの事変をきっかけに、奴隷を所持していることが明るみに上がったリカンは自宅にメスが入って、中にいたボロボロの奴隷の子達を保護した。

その後、リカンは理事長という肩書が抹消され罪人として牢屋に閉じ込められた。

それからの尋問で、リカンがこの都市にある法とは逸れた計画を奴隷商人と企てていたことが判明、商人を確保してから芋づる式に摘発されただけか。

「奴隷になっていた子達の中で、もう手遅れな子もいました。傷が深く息をするのがやつとな子や、病で薬を貰えずに悪化して回復するのが困難だった子も」

「今、その子達は？」

レストが目を閉じ沈黙する。

そう、その内の何人が死んでしまったのか。

ヴェルもそれを聞いて少しだけ涙ぐんでいたので頭を撫でてあげる。

「確認出来てる中で4人は保護出来て、今この治療院で療養しています」

最初見つけた時に、警戒されていて保護しに来たと言っても信用されてもらえず襲撃

されたことを苦笑気味で口にした。

「だけど、私が皆に伝えてちゃんとした味方であると言ったら信じてくれましたよ」
「ヴェルも行ったんだ。皆を救いに行ったの？」

「はい！ノルン様という大魔法使いにもう大丈夫だって伝えたら皆、信用してくれました！」

生き生きと報告してくるヴェル。

そっかあ、ヴェルも成長してるんだなあ。

ふと、レストの方に視線を送ると目を逸らされた。

怪しい、視線を固定し反らし続けて気まずそうにしているレストを睨みつける。

「……サリと2人で押されて仕方なく連れて行っただけです。ヴェルさんも保護対象ではあつたんですよ、ですが自分が伝えると強く言われたので」

頬を掻きながら観念したように気まずそうに言葉にしてきたのだった。

*

療養生活から数日後。

すっかり体の調子も良くなり、治療院から出て、ラズリーで暫くの間に拠点としていた宿へと向かう。

道中、レストから治療院を抜けた先にある教会にお祈りをして欲しいとの事で治療院の隣にある大聖堂に入室し、この世界では初となる修道女さんに挨拶をしてお祈りを捧げた。

その聖堂を後にして宿でやる事をやってから今日の引き上げを行うことにする。

そういえば、パーティの解散はどうしようか。

今後とも役に立つだろうし、残しておいていいのかもしれない。

久しぶりの都市内を踏みしめるように散策しつつ、一番最初に来た木造で形のいい宿に到着する。

入店をして店主に部屋のチェックアウトを頼むと少しだけ手続きの時間を要した後、

拠点としていた部屋が空いたことが確認できた。

宿から出て、次に向かうのはラズリーの城壁、俺達が最初に踏み込んだ入口へ向かう。

「これでもう、ここでの目的はなくなったね」

軽く背伸びをしつつ、門番達の所まで到着した。

ヴェルが少しだけ寂しそうに表情を曇らせてポツリと呟く。

「そうですね……私も、ここでノルン様とお別れかあ」

リカンからの奴隷の解放はもう終わっており、レストに自宅に戻ると言って引き留められてはいたけどここにいるよりペリトでゆっくり暮らしていたというのが本音だった。

大都市での賑わいでのおんびりくらすのもありなのかもしれない。

けど、顔出す程度なら行ってもいいかなとは思う。

だけど、ヴェルがそのように口惜しく寂しく言ってくるのはわかっていた。

「何言ってるの。ヴェルも一緒に来るの」

「ふえ？」

泣くのを堪え我慢しているヴェルの頭を優しくなでる。

「ペリトの時に一緒に暮らして、悪くなかったからさ。一人暮らしに戻るのはちよつと寂しいなーなんて」

一緒に暮らすことを伝えると、一瞬にして萎れた花が輝くように咲いた明るく笑顔でヴェルがそこにいた。

「おーい!!もう待っててくれたびれちまったからとつと行こうぜ!」

城壁の先で顔出して手を振っているアナの所へ俺達は向かった。

その後、大森林でエルフ達と遭遇してアナを長もとい父親の元へ戻したり、湖で魔法で飛行している間にデナが下からこちらを見てまた来なさいよと見送りされたりして俺とヴェルは数十日開けていた我が家とペリトへ戻っていたのだった。

*

「三つ目、それは従者です」

神様が三つ目の特典がヴェルであることを伝える。

どうしてヴェルが三つ目の特典なのか、人であるのに物みたいになっているのか。それを問いても神様は答えることはしなかった。

「従者と共にこの世界を暮らして、暫く経った時にわかります」

つまり、今の世界で元の世界で生きるはずだった余生を過ごせばわかる事だつていうのだろうか。

それなら、ここで死なせるわけにもいかないう神様の焦燥は的を得ている。わかった、その時になるまであの世界でのんびり暮らすよ。

そう伝えると神様は微笑み、その姿を消した。

長く座っていた椅子とおさらばし、いつの間にか開いていた自室の扉から出る。

ヴェルの事は謎だらけだけどいずれは公に出ることだからそれまでは異世界で楽しく過ごし冒険することにしよう。

心にそう銘じながらずっと眠っている意識を引き上げ目を覚ました。